詩歌連俳
季寄註解

改正月令博物筌

秋之部

改正月令博物筌　凡例

○此書ハ先ヲ行[ヲ]貝原先生述作の歳時の増補ホて洞齋翁三十年前編輯諸先生の訂正を乞て春之部夏之部既ヲ世ヲ流布をとゝ〻も艸稿駁雜ホーて傳寫の誤もあり且時務ヲ後〻事少〻〻たゝへバ神ヲ夏ヲ於々洛東の新日吉四月の祭祀五月と改〻〻ハ八幡の安居頭今十二月ふの〻行ろ其外歳事の故事又世俗のへるむ　せの内の嘉例ゑどゝろ物ゝ變ヲろ事多〻今般委

一只録ヽ

処の諸〻を経て板行を
故ふ改正の二字を蒙らしむ春夏
の部も此度正そ是又改正乃
二字を附と依て改正月令博物
筌しるるのハ究めて正しく誤ハ
此昏の正しくるりと誉めて
詩哥俳諧等給足故口ふ記しるる
○春夏の部ハ神社祭礼紀字ふ
昏せる分もあれども秋冬の部ふ至
てはさるべき祭礼又ハ世ふるく聞
へるハ皆〻八字ふ書とふハ見
易かるんが為なり
○巻毎の初ふ図形の内ふ昏さ
るハ見易かるん為ふ設置まそん

七月部目録

△印ハ俳諧の季とりの物〻

○養生の法○雨風の考○米の豊凶
○妙薬○季とりの祭○其外人家
重宝のこと〻ハ処々ふ数多あるゆ〻目録ハこれとなるさず

秋

○秋の旺なる処○秋由来 発端ノ一丁
○秋の異名 并ニ註解 一丁

七月

卦 月支 調子 陰陽生 七丁
並ニ註 七月異名 並ニ註 一丁

日令

此部ハハ七月一ヶ月日の定り
なる事ハ数〻ふ記しるる

△立秋節 二葉七 御散 三丁
△処暑中 七夕二候 六丁

朔日

○先天節 七丁
△硯洗 △机洗 七丁
△七日節供 七丁

六日

△洗車雨 七丁
△山城北野煤拂 八丁
△索餅 七丁

△洒涙雨 七九丁
△七夕 異名 七九丁 詩哥七ノ面丁

△二星 △星合 △曬衣夕 △巧夕 △乞巧
夕 △星夕 △星會 △乞巧奠 △犬飼星
△男七〻 △七夕 △七姫 △とり妻
△七箇池 △乞巧鉢 △占蛾緑

△糸の糸△この手向△度の立琴△七夕ふ
借を△水の辨△梶の葉△星契△星
迎△年の渡り△妻むかへ舟△妻こ
ー舟△七夕舟△天の川。異名和名
△秋らう衣△紅葉のもみ
△かさぎ　紅葉のもみ

○七夕之文　十九丁
△七夕毬　十九丁
△七日毬　十九丁
△京都北野御手水　十九丁
△油坊立花　十九丁
△本願寺篭花　廿一丁
△逆峯入　廿一丁
△京都文珠會　廿一丁
△六道參　廿一丁
△模賣△迎鐘
△模買人
△清水千日參　廿二丁
△魂迎△迎火　廿二丁
△中元　廿四丁
△盂蘭盆△盆會
△盆△盆供
△施餓鬼　廿四丁
△靈祭△聖霊祭△聖霊棚△霊棚　廿五丁
△柳經　其外供物
△蘭尾草△水の中　廿五丁
△墓參　廿六丁
△生身玉△荷の供　廿六丁
△差精　廿六丁
△解夏　夏昏納　廿六丁
△解、夏艸　廿六丁

十五日
△安居頭　廿七丁
△三井寺女詣　廿七丁
△水灯會　廿七丁
△施火△大文字火
△妙法火
△送火　廿七丁
△多井火
△舟形火　廿七丁
△經木流　廿八丁
△鮠广祭　廿八丁
△松ヶ崎題目踊　廿八丁
△新綿　廿八丁
△つと入　廿八丁
△鷹場出　廿九丁
△宗祇忌　廿九丁
△京都御靈御出　廿九丁
△諸芸地藏祭　廿九丁
△文覚上人忌　廿九丁
△愛宕火　廿九丁
△夢山別　廿九丁
△信州御射山穂家作御神事　廿九丁

月令

北部ふい日のさぐまゝざる七月一ヶ月のしゝ

△摂待△門茶　廿九丁
△燈籠△高燈籠
△きうこ△舟つろ△花つろ△折　廿九丁
△盛籠△鮒のぼり
△踊　廿九丁
△花火　廿九丁

△秋の扇 △戸まく △團扇 七ノ卅二丁
扇をとる △團をとる
△京六斎念佛 卅二丁 △相撲角力 七ノ卅三丁
△ことり使 △もろこべ角力
△そまつ △辻をとる

時令

この部ハ七月一ヶ月時候
かゝるゝ紙あり色しるを

△初秋 七ノ卅三丁 △残暑 △のこる暑さ 七ノ卅四丁
△餞暑 七ノ卅四丁 △稲妻 七ノ卅五丁
△秋の初風 七ノ卅六丁 △秋涼 △新涼 七ノ卅六丁
△初嵐 △初暴風 七ノ卅六丁 △冷し 七ノ卅七丁
△二百十日 七ノ卅七丁

草木

△萩 △糸萩 △白萩 △小萩 △萩の鯛 △秋ゆくの萩 七ノ又 卅三丁
△楓 △青楓 七ノ卅八丁 △桃 七ノ卅九丁
△柞 七ノ卅九丁 △檀 七ノ卅九丁
△櫨 七ノ卅九丁 △木槿 七ノ卅丁
△朝貝 七ノ卅丁 △秋海棠 七ノ卅丁
△玄及 七ノ卅丁 △桔梗 七ノ卅丁
△沢桔梗 七ノ卅丁 △蘭 七ノ卅丁
△建蘭 七ノ卅丁 △女郎花 七ノ卅丁
△茶の花 七ノ卅丁 △仙翁花 七ノ卅丁
△観音草 七ノ卅丁 △翁草 七ノ卅丁
△弟切草 七ノ卅丁 △益母草 七ノ卅丁
△鳳仙花 七ノ卅丁 △旋覆花 七ノ卅丁
△野菊 七ノ卅丁 △やゝこ花 七ノ卅丁
△曼珠沙花 七ノ卅丁 △常山花 七ノ卅丁
△顔桐 七ノ卅丁 △蒐麻子 七ノ卅五丁
△渋柿 七ノ卅丁 △茗荷の花 七ノ卅丁
△尉金花 七ノ卅丁 △薏苡 七ノ卅丁
△蒲萄 七ノ卅丁 △紫葛 七ノ卅丁
△桃子 七ノ卅丁 △木瓜実 七ノ卅七丁

△槐花 七ノ四十七丁
△蓮子飛 七ノ四十八丁
△刀豆 七ノ四十八丁
△夕貝実 七ノ四十八丁
△[illegible]瓢草 七ノ四十八丁
△西瓜 七ノ四十八丁
△このてく[illegible] 七ノ四十九丁
△棗 七ノ四十九丁
△栗の穂 七ノ四十九丁
△稲葉の雲 七ノ五十丁
△稲の花 △富草花 七ノ五十丁
△早稲 △早田の稲 △[illegible] 七ノ五十一丁
△室の早稲 七ノ五十丁

生類

七月の生類を集むといへども㈧㈨之の季の物は八月又九月にも用ゆる物也

△初鷹 △小たか狩 △初とや △初鷹狩 七ノ五十一丁
△鷹打 (八) 七ノ五十一丁
△荒鷹 (秋) 七ノ五十一丁
△鳥屋勝 七ノ五十二丁
△鳩吹 七ノ五十二丁
△秋の蛙 七ノ五十二丁
△秋の蠅 七ノ五十二丁
△秋の蚊 △濫蚊 △残る蚊 七ノ五十二丁
△秋の蛍 七ノ五十二丁
△秋の蟬 七ノ五十二丁
△蛁蟟 七ノ五十三丁
△茅蜩 △寒蟬 七ノ五十三丁
△秋のてふ 七ノ五十三丁
△田畑虫送 七ノ五十三丁
△蜻蛉 △キヤンマ △アキツ虫 七ノ五十三丁
△赤卒 △赤とんぼう 七ノ五十三丁
△蟲 (秋) △虫の音 △虫の声 七ノ五十四丁
△虫撰 七ノ五十五丁
△虫合 七ノ五十六丁
△虫尽 七ノ五十六丁
△虫籠 七ノ五十六丁
△虫賣 七ノ五十六丁
△轡虫 七ノ五十六丁
△月鈴虫 七ノ五十六丁
△松虫 七ノ五十六丁
△蟋蟀 七ノ五十七丁
△促織 七ノ五十七丁
△蚣蝑 七ノ五十七丁
△竈馬 七ノ五十八丁
△稲虫 七ノ五十八丁
△阜螽 七ノ五十八丁
△樵虫 七ノ五十八丁
△蓑虫鳴 七ノ五十八丁
△馬追虫 七ノ五十九丁
△稲つき 七ノ五十九丁
△藻鳴虫 △善佳音 七ノ五十九丁
△蚯蚓鳴 七ノ五十九丁
△蟷螂 七ノ五十九丁
△常山虫 七ノ六十丁

必用 七月一ヶ月。養生。天気。衣服の式等 要用のこゝかしらす

○楽事 七ノ六十丁
○破早鮓 七ノ六十丁
日刻〻 七ノ六十丁
○方角 七ノ六十丁
○天気占候 七ノ六十丁
○衣服の式 七ノ六十丁
○萩かさ
○花ものき
○女の衣服 七ノ六十丁
○養生 七ノ六十丁

飲食 七月一ヶ月の食物一切料理こん立等とゝのゑす
○焼米 七ノ六十丁
△切麥 七ノ六十丁
七月料理献立 七料ノ一丁

月令博物筌秋之部發端

鬼を内に追ふるい秋の気の旺る多ゝ

礼記の註に曰秋と小陰〻今其気衰成月皿陰に至れい陰もそこに盛く陽はこゝろへ陰きえるとして秋を人陽と云て陰さうゝ

ゆゝ秋い養生と才一とゝろと以て時令に順ふこゝろ

秋由来

漢書律暦志に曰秋は秋孚ゝる物孚敛して成熟ゝる也こゝろ孚敛ゝいはゝ孚ゝいふ義ゝ○和語にあきゝ訓ゝる事は陽氣去りて天色さえあらはるゝ事ゝ陽氣去りて天色さえあらはるゝこゝろ又一説に緋ゝの心を草木の葉はあかゝゝ木のこゝ色づくゆへこゝろ

ゝ方と西ゝ秋を西郊に当ゝる事は礼記に易通

統圖に日西方の白道をゆくなりと西陸にてみしと見えたり

和歌に秋の方角を西によみしる例は古今集藤原勝臣の歌に

秋ぎりは たちにけりとみえてなのうちにあるかの

西にうの杖のえだにあるかの

とよみたり○精は白虎とは淮南子に西方は金にてその獣は白虎とあり○人は義なりとは淮南子に秋と矩とは矩は万物をたゞしくゆるゝ義は成なり成は方なり物の角あるかゝりにて人に於て義のある心なり○天は昊天とは元帝纂要に天を昊天と有て註に昊は愍なり万物の愍傷なるゝ故に愍むと見たり○卦は兌なり易に兌は正秋也とあるによれり○氣は小陰なり因の上○臟は肺なり人身の肺を五臟の花蓋にして上に居し金に属なり故に秋に配當なり 医昏

に見えたり○色は白なり礼記に其帝は少皞とありて註に少皞は白精の君金天氏なりと見えたり○味は辛なり礼記に其味は辛し其臭は腥なり有て註に辛腥はなまぐさしと見えたり

秋異名

白藏○素商○揫敛○金德○短晷○商應○五政○木落○陰中○金勁○西灝○金行○士感○菊時○蓐秋○爽籟○少皞○收成○金商○朗景○明景

異名註

白藏は色藏は收藏なり爾雅に出

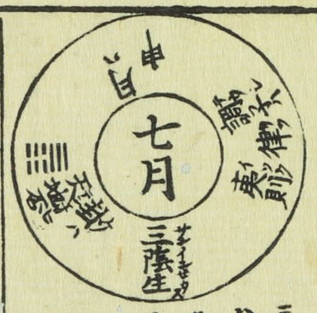
○素商は云は素も白なり商は秋の律なり○素秋も此理なり

○季歛は歛は歛なり○金は盛なり○徳在金は月令に有り○短晷は

○日陰ハ○商應ハ潘安仁ガ詩ニ出
○五政ハ管子ニ出一曰博塞ト禁ヲ二
曰五兵ノ刃ヲ見ル事ヲ禁ル二正旅
農ヲ慎ミ聚收ヲ趣セヨ四日欽
ナラシメ補ヒ折ヲ修ム塞ゲ五日墻垣
ヲ修ム門閭ヲ周ハセヨ己上五政ヲ
○木落ハ木葉落ツ楚辭出○隂
中ハ前漢書律曆志ニ有○金勁ハ冥淑
ガ秋賦ニ金気方勁ニ○西瀕
ハ前漢書郊祀志ニ出ル○金行ハ德
サカンニ行ル○士感ハ文
夫秋ニ感ズ○諺ニ云フ諺ニ云フ○
菊時ハ時ヲ守ル○蓐收ハ
ツマリ收ル○爽籟ハ
る秋の声ヘ○少皡ハ秋の帝ニ配す
己上元帝纂要ニ有リ○收戎ハ
ちゝ
ち○金商ハ金ハ秋の德商ハ秋
る○朗景○明景ふる秋の景色ヘ
○右の外秋三月ニ渡る季の物
ハ別ニ三秋の部あり

七月之部

△此印の分是ハ俳諧の季寄ニ用ひ来る物ヘ



三陰生ずるハ秋ハ陰の初なる故ニ孟秋ハ名ヘ
地初メテ肅ス○肅ハ引ノ
ツヽシム心身ヲ
ちぢまる心身ヲ
ひしひしと月ヘ

○律ヲ夷則ト云フハ夷ハ傷ル万物
始テ傷ル天刑ヲカフムル故ヘ前漢書出
○卦ハ天地否ト云フハ夏の三陽
上ニ有リ秋の三陰下ニ有る象

七月異名

△孟秋礼記出△上秋韻府出
△孳秋纂要△首秋韻府
△新秋韻府△早秋同△蘭秋事物異名
△開秋同△蘭景同△相月△孟
商同△夷則月同△湘月留青茂珍
△蘭月同○相秋同△玉衡同△新
節韻府△爽節同流火同△初
秋纂要△盆秋△涼月同書出

和名　△文月　奥義抄　△ふみ月　同　ふであひ月　秘蔵抄　なつよ月　莫尋抄
△あをゝ月　藏三十八月　同
ふゝみのき月　同　あゝ七月　莫傳

異名註　△秋ゝ　孟ゝ　そゞめと云字なるゆへゝ　△上秋ハ三秋の中にて七月ハ上ふたつ月なり
△擎秋ハ擎ハそゞめゝいふ義なり
△蘭秋　楚辭ニ出　秋蘭と紐て佩ゝとゝあるにとりていへり
△開秋ハ開ハひゝくゝと云義にて
もゝ咲て秋ふかき月といふ心へ
△蘭景　これも楚辭の秋蘭の故實
△首秋ハ首ハそゞめゝといふ義なり
△孟商　孟ハ初の心商ハ秋の義へ
△湘月　これも楚辭ふ此月湘君と
いゝみやらへゝとあるゆへなり
湘君ハ舜帝の后なゝ
△夷則月　夷則ハ律の名へ呂註なり
△盆秋ハ此月盂蘭盆會となるゆへ

△涼月ハ礼記月令ふ孟秋の月凉風至るといふよりて名ぢく
和名註　文月ゝハ七夕ふ借をゝて色々の文ぢなれば
ひゝき月ゝひゝをゝ暑にて文月ともふ
月もいふへゝとぞ　奥儀抄ニ出
○ふみ月といふ月ど約束ていふなり
○めぞあひ月ゝハ牽牛織女ゝ逢ぶ
ひふ愛あひ月ゝ
○なゝよ月ゝハ七夕のゝ名なり
△とみをゝ月　下ふ考る寸哥にて
そのこゝろはまびゝふ見えたり
○ふゝひゝ月ゝハ七夕ふかなり
ゝて香物をもゝるゝこゝろなり
○あさゝ月ゝハ秋の初めを數て云へ
(三方)　秘藏　そゞめあひ月
七夕ゝをゝくあひ月ゝ
いふんのゝれゝるゝ

藏玉　七夕月　家隆
秋のゝうちの七夕月　ちぎりをかけてまちぞ

七夕月のこころもちふる

△ふみひろき月

七夕の夜ふけぬるのこゝろ

ゆくすゑ〳〵ひさしきを

莫傳　秋月

風すゝかぜのとうつてむ秋みのり

秋の初月とわかふうしき

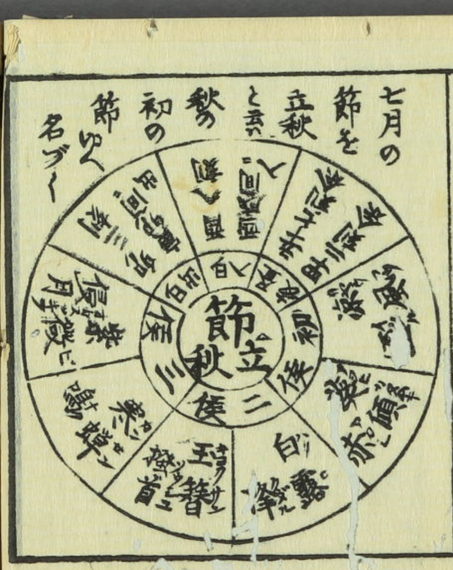
藏玉　ゝゝゝ月

七夕の夕ぐれをふきくるやこゝろ

名ゝゝゝゝゝゝゝゝ月

△立秋　節の名○七十二候○草木七十二候○

至夜長短○日の出入等左の記と



○涼風至る　天地の仁気散じて殺伐の氣ふうきたるの葵もかゝひきて赤くなりしをとうう

○白露降る　秋の陰氣夏の陽氣かゝ衰して気候まゝ下るを

礼記の註ふ見えそう

○玉蕤花を催ふ　蕤花と橙と

○寒蟬鳴く　暑中ふ生じて蟬の聲ふ衰えるといふう

○紫微月を侵す　紫微星とゝ

ゝゝゝゝゝ位乃月ふちうげくと

たゝゝゝゝゝ

立秋　七月の節ゝ　和

哥連歌ふ七月朔日ゝ

○初秋ふ秋立て三五日ゝてゝゝを

ゝゝむべ〳〵ゝ無の時令の外ゝ

ゝるを初秋の題ふか立ゝふ

とゝむゝゝ立ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ初秋ゝ

㊐夫木　立秋　定家

夕べを秋のそらに吹くなり
涼しくひゝく風の音かな　後鳥羽院

夫木

萩をうつれる夕露のみぬすみ
あれのゝ虫のこゑぞ聞ゆる　御製

亀山　立秋朝

今朝の秋の風に袖ぬれ
ひとしほ涼しき夏衣　為尹

千首　立秋風

秋ふかき夏の草ぶかく
いつしらぬ秋のこゝろ風　師継

同　立秋鶯

夏ぞきしなくなりもあへぬ秋の声
あうちさゝみて秋に落かな　重政

千載　社頭立秋

秋山の松ふく風もなれぬれば
いろかはりてぞ涼しき　重政

同　夕べの秋

夕べの秋の秋もむなしく
ちる一葉の相の玉ぶるゝ　入道

入道。今秋のこゝろ風。和歌風

△秋の来る△ときの縁。秋あり△
○ゝゝ也。今和歌ゝ扇ゝ

連　ゝゝ秋ゝゝ都ゝゝふの秋　宗祇
秋風のきのふ似ぬ今ゝ分　紹巴
ゝゝゝゝ月の秋　宗長

俳　ゝゝ玄和の文月ゝ　直正
涼青の玄関法師ゝ名きの秋乙由
暑いきゝ名ゝ風ゝ名きの秋十ナ

詩　立秋五字對句　同上

詩　立秋七字對句

秋暑用人乃御扇　爽気浮
晩風生竹却添衣　入
迎秋日色芳前景　白雲

入夜鐘声竹外来秋
ヨニハ星ソラニ高シ

詩　立秋詞　明　葉韋

烟雲類淡仲宣樓　千陀
逝水流　ヒレタナツタノタ　タウト人上
タラスルコモロコシノ仲宣ト云タ人ガ賓客トモニナリモリレタソノタカトノヲ仲宣ガ樓トイフ故事ナリ○此詩ハ星ソラニ高シ九月日ハテウドユクニツノナガレヤナルモノゲヤ

白雲郷山千里外　満
城風雨又新秋　カレラノレラガニナルニテ故郷ヲ千里モヘダテヽダビノシラニブラツイテ井ルヽニ此外ノ城外一面ニモノスゴイアメカゼガヨコルトオモヘハコトハツヒキニナツタニジヤ

立秋故事　載樹葉　唐ニ女童樹ノ葉ヲ色々ニ切テ花ノカタチヲナレ今日カザレニイタヽク花日本ニテ柳ヲカケ菖蒲ヲ髪ニヽクニヒトレ要華録ニ出タリ

○日本ニモコノ事往昔アリレトヅ

立秋故事　一葉

一葉知秋　管言故事ニ出一葉トい桐のこと

△桐の一葉△一葉散△桐の葉落る右ゴ是もれるこゝなり

○淮南子ニ曰梧桐一葉落天下知秋トイヘル事ヨリ出タルナリ

○程明道ノ詩ニモ

詩　井梧一葉報秋聲トモ作レリ

○道甲昏ニ曰梧桐立秋ノ日一葉先ヅ落トモイヘリ

詩　夫木　國夏

[illegible]
囲辺ハ[illegible]紅ノ秋風ホヤ[illegible]なの[illegible]

連　本ハ[illegible]ヨリ月の秋ヲ一葉ノ宗牧
風ヤ[illegible]ヲ秋の一葉ハ紹巴

能　お[illegible]ハ[illegible]ヲ[illegible]ス桐一葉　移竹

狂　[illegible]
風の一葉のち[illegible]

立秋故事　一葉舟　小補韻會ニ黄帝浮葉ニ[illegible]

ツクルト云故事トヲチニレル叺ス淮南
子ノ一葉落テ天下ミナ秋ナリ
トイフ事トヲトリアハセテ季ト
シタルモノナリ

㊂　廣沢の長孝か七夕の云ニ
天の川星のそやしの　蜂風ニ
ちるや一葉のつまむくへ舟

㊊　蜘の家で遣る一葉や秋夜舟　直正

立秋故事　△柳散（やなぎちる）　此ゴロチリソムル故ヘ柳桐ノ類ハ早クチ
リ初ルナリ○事文類聚ニ晋ノ
顧愷之ガ詩ニ蒲柳之質望
秋先零ト云フ語ヲイダセリ
コノ故事ニヨリタル諺ナリ

立秋故事　△一葉衣（ひとはのころも）　是ハ口ノ一葉ノ故
事ニ一重ノ衣ヲ
取アハセタルモノナリ
○右一葉の事よりいづれも立秋
一日にかぎることにもあらざれ初
秋の事によりても然るべし

立秋　天氣　立秋よりほどなくて東北の風ふきそむれば
稲に実入らず○又蕎麦あしくなれば
秋収よろしからず○夜ひでり
すれば大風なしこれを夜北と
いふなり昼あつく残暑つよく
夜すれてさむし夜北吹けば
ほどひて日和よく虫けなく稲
に大よし○南風にはけしたぶ
ありされば雨になる○秋季はくも
りしげく出ても風出ざ
ればあめふらず○朝ぐもれ
ひがしの方きくとひかりやけ
きば陽気のさうんなるなり南
へ赤くはれてほどひて日和よし
○朝天雲のやけるは二三日の
うちに雨ふる○夕やけは
れはよきなり…雨
まりもやく遊るも又雨なり
○朝の虹は西に見ゆ三日のうち

雨ふるゝ暮のあゝいひぐいにあ
て晴ふゝる○朝夕くもにあゝの
真直ふるとかくゝと棒虹と俗
ふゝかゝ沢大風ふゝかゝ

立秋　**雲氣**　白雲東南の方より出
て空ふ沈ぎき出るバ大
風ふるこの風と伊勢東風と云
○西の方より東のかゝへ行くハ
西南西北ゝふ小日和よゝ○黑
雲天の川とゝゝけハ風雨あゝく

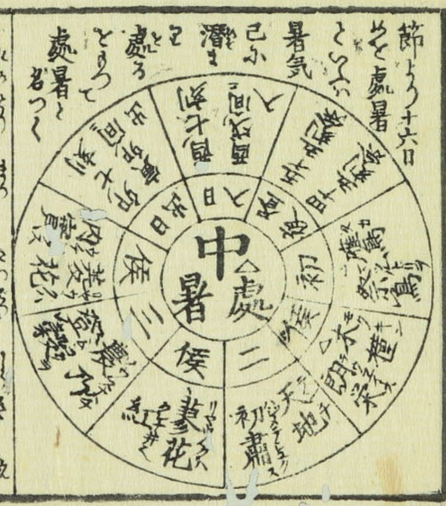
(字)千首　初秋雲　爲尹

あゝのゝゝへのゝきゝゝれ

(能)足巻し紙なハよゝ　秋のゝ季吟

立秋　**妙藥**　立秋の日西ふむいて
赤小豆十七粒或十四粒
を井花水にて呑ハ秋中赤白痢
病とゝゝふ事ゝ

處暑　中名へ七十二候。草木七十二候
○昼夜長短○日の出入左ふ記す



△處暑十六日
立秋ゝ處暑
とゝゝ
暑気
已ふ
潛
と
處ろ
白露
と
處ろ
秋分
とゝて
處暑ゝ
名つく

△鷹鳥を祭るハ殺伐の秋氣を得
て鳥を捕ゝ沢の四面ふゝゝ置ハ
祭をするふ似しゝ是を鳥を祭る
しハの獺の魚を祭ふ獺ゝ

△木槿朝榮をゝハむくげの花咲
ゝ催しゝて菓ゝもゝ
をゝハ△天地始肅ハ天地の気秋
ふゝてゝ

△蓼花紅ハたでの花ゝ也

△農乃登穀とハ此月農人ゝ五穀
の初穂と天子へゝめ奉るゝ是
ふゝて天子新と嘗むと祀

見えそう本朝新嘗會も是くよりの
○菱花内実ふ記実でなるうう

日令

此部小ハ七月一ケ月日の定りなること支の定りなりと記す

朔日　○南風あれい米の價貴ー
今日風雨あれい米粟大ふよう

先天節

今日聖祖降誕の日ん依て名づく　事物異名集出

朔日　○本所羅漢寺五百羅漢
江戸供養施餓鬼あり

朔日　○下諏訪明神秋の宮祭り
信濃委しくい年中行司綱目ふ出す

三日　○鳥羽院御證月御忌今日ん
京都竹田村安樂壽院ふて行なう

四日　○祇流ーの神事。祇園とも云
伊勢昔ハ土貢島より祇と棒げくう神事い風の宮すて行い
る祇の浮んで流る時ハその年豊年とし祇の考づくうと
くい凶年とこをぼうう

○ふふことくくせものむひろさあくを寂阿方の出かーハ

五日　○建仁寺開山忌。諱い栄西千光國師葉上坊僧正と云
京都

六日　○高臺寺施餓鬼什物出る。四条
二条河原七夕手向の笹流ー

六日　六日ふ降る雨とうう七夕の車を洗ふと云
洗車雨

事ありくそ歳時雜記見うう
又日本歳時記ふも奏ーく考す

六日　○机洗。京師の児女今日硯机を洗ひ清める事
硯洗

の葉の露とうう梶の葉ゑ七夕の手向の詩哥と昏さ供とるく

六日　北野天神の社今日内庫ふ納めある
山城北野六拂

神宝を外へ出して虫干ふ其間ゑ内外の陣の燻くくひとうすく

○諸谷北野御手水六日とるー
燻えうひ七日くもるい誤ア

七日 ○西南の風と金風とつゝ米寒少し ○雨ふれば八月に洪水あり 但し小麥・麻・豆のたゝ傷やとゝまぜ

△七日節供 今日内膳司より當日の節の供御を献ずとゝぐて供御に毎日奉る物なれども一年の内節々に奉ると節供といふなり

○七は少陽不變の數なり故に當七日は本朝五節句の一也て祝ふこと日本紀江次第公事根源等其外諸書に出て歴然たる式日なり 俗二星の祭りに かくなりて公事の式日なることを忘れたるふ似たり

△索餅 昔高辛氏の小子今日死す其鬼となり人を

△やまき 常に麥餅を好むこれ餅を供じて瘧疾をまぬかるゝよう十節紀に出たる今日の節句に瘧を除くゝ為也と いつゝ此ゆゝや今日親族索麺とゝれなり又索麺を食ふなり

索餅 索麺のこと なり麦索もいつゝ風俗考に出たり

生花式 撫子・桔梗・槿・萩・葛・尾花・藤花

七日 △洒涙雨 七夕の雨をいふ牽牛と織女と別るゝを悲しみて流す涙なり 唐土にて物りくいふ

△たゝ柔 たゝくい 串文類聚天中記等に出たり

七日 △七夕 △二星 △星合 △嚏衣夕 △巧夕 △乞願夕 △星夕 △星會 △乞巧奠

△男女異名 牽牛星経 河鼓本雅 牛郎 牛星 晉公決録

月和名 △彦星 和名抄 △犬飼星 月

牛ひく日〜歌林抄△男七夕

△七夕異名　織女星経　天孫　柳文　星娥　詩学大成　天娥　宋詩選　天嬪　同上　△女七夕

同和名　たなばたづめ　古今集△とりつまき

○七夕七姫　△朝負姫　△梶の葉姫　△百子姫　△薫物姫　△さがの姫　△秋露姫　△糸織姫　已上を七夕乃七姫と

いひまゐらす　日本草に出さう

○又七夕七姫の一説　○槿姫　○梶の葉姫　○秋天姫　○琴寄姫　○灯姫　○糸織姫　○蓼蛉姫　已上神中集の説

○諸哥の名数和哥選といふる昏ふ出さゆく暑之右名数和哥選に多くあり名哥のこゝ後とい

絵ふあ〜ひとくうとるこうに秘受口傳とのとる故初学の人を

見て大ふ便りふるる昏なり

○七夕祭と乞巧奠　たゝとゝとゝて女の手こゞの器用ふるるこゝれ乞ひいのる事なり奠

いまこゝとゝむ字あり日本こゝて天平勝宝七年ふ禁裏にて初て行る先御殿の前ふ白木の几と立て〜立琴〜て十三絃の箏と

呂し律の調子ふ合して柱とゝそ

凡菓の類とあ〜べ竿のうへ五色の糸とうけつゝれたらつよ水と

〜へて二星の影とうつ〜香花

とも〜ゝ祭らるゝよう〜江家

次第にも委〜く記さるう

○唐土ふも此夕ハ婦人あつまて五綵の糸を以て星の影ふむひて七ツの針のゝ〜ごゝ孔とゝ奠よ

孔ゝごりのとゝるゝて巧と乞祈る

ふ蜘蛛が糸をかけるへるゝ巧とい孫ゴひのゝる

上ふさるゝ〜ゝ

ふゝ〜ゝとする此　荊楚歳時記見う

○今　女子竹の枝ふ短尺と

はたらい和哥と手向るまゝにして和
國の風ゝ竹の葉ゝ糸とりけて祈る意

△とり妻　逢ふ人の名づくるなど又万葉ゝ

(哥)やちゝせの神の人ゝ人ゝ若んとゝ入九
又灯火姫ゝも入り證哥名
教和哥選ゝ出ゝ

○故事詩哥次ゝかゞく出す尚
又天の川ハ川ゝそいゝ小星の
あつまりゝる日ゝ七夕の由来
其外和漢の故事詩哥等委
しく日本歳時記又い銀河抄
等ゝ出すれゝ

△七箇池　△百箇池も。七ッの
盥ゝ水とゝ星の
影をゝいゝ

(詩)新古今　長家

ゝゝ月ゝくゝもむへき宿の池ゝゝ
やゝ今の新もやゝれやゝん

夫木　右京大夫

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝゝいのゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ

(俳)宇今の盥ゝゝゝゝゝ妹背山　因元

△乞巧針　婦人七孔の針ゝ色々
の糸をゝとして七
夕ゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

(哥)千五百番哥合

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

△占蛛絲　婦人ゝ茄子等ゝ供へ
祭ゝゝ次日早瓜の上
ゝ蛛れ巣とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と得ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

△願の絲　五色の糸と竹の葉ゝ
かゝゝて手向るなり

(詩)願絲七字對句　詩礎

全ク天ノ天ノ
織無天上支機石
昔張騫ト云人ガイカダニノリテ天ノ川ヘイテヨク女ノ多アモリ石ヲモラフテ
ヒキ又十五ハ前ノ晩ニ三三五五ニ分ケテ七夕ヲ祭ルヤウニスルトキ

穿針時
カタノハリヲトキ
ハリノミヽズニ
トラトラストキ

信有人間乞巧絲　願絲針

人間世界テコヨヒ子ガヒノイトニハリヲ
ヲトレテ婦人ガオモフヽニキヨクニナリ
タイト思フヿハヽヨヒ今モアルヿヒヤ

ナガイノイトガ
スヂカヒニ三ヱル

星に手向燈火其外何にても今日星に供する物と云

常盤井入道

(宮) 夫木

向者のおれをこのよに向して
庭にかゝる秋のとりひ

庭の立琴

(宮) 夫木七夕のあみ
後れ庭ふをく琴の
あくうにもくいさかものいと　寂蓮

(能) 立琴や秋にまかしし糸琴菊乙

七夕に借

物どして七夕に供ずる物
をかすしいふ中にも
いろ〳〵に衣とかゆるとて是
とも手向〳〵なり

(宮) 後撰　せきあ長ふれをる押ひて
七夕つめふるとものゝ　なふ　慈圓

水樹草

貞徳の説に水影
草い多くい七夕り
よりゝ〇水樹草も稲のこるて
稲い水に影のうるるの故水影
草と弱く尚又盆の處ふも記と

(宮) 延文百首　賢俊

七夕乃結ふ紐ふ解りハあるの川
あゝ年の嘉もゝ〳〵し

梶の葉

七夕ふハ七枝の梶乃
葉ふ手向の歌とか
き五色の糸にてまゝて屋の上
ふあげをゝくものなり　中院通
茂公の御説なり　淺雲問答ニ出

(宮) 夫木

かさしにする梶の七ふよ
れあまり　入道前大政大臣
新古今七夕のとゝろ紙の梶乃葉ふ
いく秋〳〵つ葉の玉つさ　俊成

(連) 梶とゝう変れ葉ゝるし糸紙

(俳) 梶の葉や葉ふ葉ふ葉ふ葉り杉水

(狂) 梶の葉ふを紙て筆の樟さと
ゆのいとゝ公漕やゝゝゝん　魯石

○一説ふ梶をそいすく楮を紙を造る木の葉ふ哥をかくなり

星契　牽牛と織女と年々今宵の逢瀬と契約する心を

△(元)草庵　彼の巾も吹よ天の花風と
ぬるゝとたのむ星合のそら　頓阿

星迎　織女　牽牛ときらむ
△くるる夜といふ心を

年の渡　一年に一度天の川
△と渡りて牛女の
逢ふをゆくゆくよりゆくゆくよりとく哥にもよめり　乃至

(元)続拾　ふる雨に
多流いちりの川　隆康

妻迎舟　織女が牽牛とむかふ出る舟といふ心を
△(元)白川百首　頭朝
天星のつるむ人舟いふして
まれふ多ふやふ　乃至

(俳)一説やさかの姫と迎へ舟是等

妻乞船　牽牛乃乗りて来る舟といふこころを
△(俳)日も多ぬぐや舟のもと女七夕賀春
○星の契より此外そい哥の詞

七種の舟　草花をそて舟とかざりて七夕を祭るなり
△○秋。あさ。尾花。葛。女郎花。
ふぢばかま。撫子。これを秋の七種と云

秋さう衣　彦星の着て
△(元)万葉　七夕のいほそこ立て織る布の
秋さうこころもこれをそうこん
夫木　七夕のいほそこ立て織る布の
秋さう衣彼うそをそ　赤人

天河　異名　銀漢　韻府　天漢　同
△星河　詩学大成　明河　古文
天潢　梁何遜詩　銀潢　雞肋集
雲漢　唐詩記

(和名)　いまの川　亭あまのかはくは
やと川　重玉　星のやとかり　四季物語

(ろ)　新勅　後二条院

ふるあらい川浪たつる天の川
　ふるてまれ月の秋の夕雲

(連)　波さわぐやくせ天の川　宗祇

(俳)　七ツまふ間ひ待られつ天の河　珪林
むさ世ふくて細しての河　珍洲

系ものとそうまて嬉しい紙の河　超波
浪もの芥流をやられ河　半雪

(狂)　をふしいかさ流うを天の河
玉のさうさはしい合の元　紫若

(詩)　銀河詞　杜甫

常時任顕晦秋至最分明
云モノハツヲニ見エタリ見エナンタリシテ
モ気ノツカヌモノジヤカアキニナルトキツウ

縱被微雲掩終能永
アキラカニ見エル

夜清
テモツイニハヨドラシニキツカリ
カノアノカハガムラ雲ニオホハレ

雙闕伴月落
ト見エル　舍星動
ソノアノ川フクンテハキンリノオンナガメ
邊城
ナリ月カゲニツレテハ辺鄙ノ地ニモ見エワタルト

牛女年々渡何曾風浪生
牛織女ノ二ツノ星ガアイ年コノ天川ヲワタレ
川ナガラユハ二風ヤナミノオコルコトハアルマイ

(ろ)　紅葉の橋　次の詞あり　草庵　頓阿

今日いよいよ雨ふさらしたれの河
　ふれる井ゐるやうるみん

烏鵲の橋

橋○織女ハ天帝の女牽牛を夫として後機を
　おるこ紙れこうゆへ天帝怒
つて其中をさらり河を乃ぐて
住しむ七夕ふ一度會事をゆるす
烏鵲この橋となりて織女を
越さしむるこいつりをとんと
をはこれこの橋ふいつりて紅
涙を落すこれふるて紅葉の
橋ともいつれる俗謡うて
信用をるふなるずをぞふ博物
筌ふ和ど○かさらだろ
これ種類なろう

（ろ）夫木　俊成

七夕の袖にえぬ契りを添へしかな
さびしかるらんふるかさねの
（俳）雨後かさねてそ出の橋も五月雨

七夕の歌詩連俳

（い）六百番哥合　家隆

雲のふる紅葉の庭のとりひろこえぬ
ようやあめのうん星合のそら

夫木　為家

雲とまえいくの世もかさねてのかさねふるれを星合のそら

永久百首　七夕後朝　兼昌

朝風に川波さわぐ一夜つる
袖ゆしぬふも立ちなくく

家集　海路七夕　経信

星合の新たうつ舟なるこの海も
天の川波のうちをもれ

新續古　待七夕　洞院摂政前左大臣

天の原そこ〻ゆる河のもとより
あれよいあふを待ちそなん

續古　七夕別　家隆

天の川あれのさやをの降るそよ
もとたゝ降る波ぬきそ

續千　閏月七夕　前中納言定房

契りあそれ百ゑをの数をて
ことひもとゝせ天の川ふも

白川七百首　二星適逢　俊成

七夕の逢いさしも遠うし
なく一ふ一ふ一ふ一ふ

哥合　閑思七夕　貞継

八重葛まのの彩ゆるかなて
ゆ〻合の宮を強ちつるる

白川　七夕契久　御製

七夕の天の羽衣いそなてゆ
はるゑやゝふのたゝ〻ふん

（詞）あふよ。年ふ一秋の契り。また
ゆる中。をのゝ。秋の一夜
。恋ゝる。遠流。たえ長き
七夕の花はなに。恋の考。庭の恋

天ニハ星合の空○行合の空○初秋
の空○夕づく夜○月の御舟 風ニハ
夕の袖吹かへすと 雨ニハ 七夕の涙か
○天の河あまのかはらもあまの渡らし
雲ニハ 空の衣○雲のかよひ路 年ニハ
年に一夜○ひとよにまれなる○年よ
ね契り 天河ニハ とわたる舟○水瀬○八十
瀬○渡瀬ふむ○河瀬○河長○河と
舟ニハ 浅まむかへ舟○紅葉の渡舟○か
へさの舟○天の川舟○やそのわたし舟
○月の御舟 橋ニハ 紅葉の橋○かさ
さぎの橋○浅瀬の玉橋 夜ニハ みじか夜
枕ニハ 天の河原に岩まくら 床ニハ あふ夜
の床○玉床○塵うちはらふ 衣ニハ か
せる衣○天の羽衣○秋さる衣○
ぬれてく衣○雲の衣 糸ニハ 願の糸
○竹の葉に結ぶ糸○七夕の糸○七
夕のまつりの糸 梶の葉ニハ 梶にかくまた
のえ 夕ニハ まだ舟もいそく○夕浅く夜
暮ニハ 立まちてぞ○明ぬ○わかれてもよ

寄 はかなくも七夕の胡麻の葉の寄り
て七夕にすのまでも雲か名のみ七夕の空
よそに見て 玉棚 寄の玉つぐ七夕 よそにみて
よそ山 ふ手向ることある 機 衣又七
夕のいとなく ささがに 庭に火を立て 浮木
なぞくとまる 手向るある
かさくとあり 七夕のされ一衣と衣
天の川にかかる 神代 神代のうしとよあり
代よりまめてる 萩 萩の手きで七夕のと
をしむとあり まろうききうくらひ
又めでて手向る 七夕よかざる衣の紐
ころもよあり とぞる にこえまたおしてたむけ
るん 葛 くつの葉も まれにめる秋の常夜と
とも
又雲ふうけ てあるあり 女良花○萩を名にあさ
うは 呼ぶ七夕の 七夕あり こひうけ妻 天の川 おうけ
るくと 誰のあるまひ くものかるふ あり ころかわ人の
るるきるせしいふ されば七夕も まいへの名取したのまんとて 立て寄る
むし 七夕の衣を 織てまとふ かるもと やあかうす さまあり

(連) たなばた流やきの浅つの葉の秋 行助
夕舟にた月や仰ぐ天の川 [illegible]
行合の方や雲井の天津星 宗[illegible]
行合たや七日に星の衣 心敬

笑ふ合のうつくしさ　宗牧

俳七夕かさひいらぬ合羽　芭蕉

鵲や九たの上うちの川　晋

乃ゝ古ゝて波ゝう星祭　十丁

浮雲のうかぶ夕べ　才麿

文ひや花世小蔦る天の川　露播

胡瓜り来りて宮の別る　二柳

死ケ合ハ年や幾世なるかち　立圃

笑合のかゝゆ多や飯し汁　移竹

去ぬ〻と残桃の七夕やよめ子　負佐

狂　夢ゆくて　むかる附京の瓦ぬ川　雄長老

七夕ふ恋をしし元京弁ゑ

かーまず紛ふあ〜くめきれよ　由縁女

詩　七夕五字對句　同上

巻慢天河入

故郷臨桂水

今夜耿星河

詩　七夕七字對句　詩礎

月渡天河光轉湿

懐良霄

鵲驚秋樹葉頻飛

銀漢回

當簷半落天河水

織女星

遠徑全低月樹枝

笑牽牛

詩　七夕詞　王建

銀燭秋光冷畫屏

輕羅小扇撲流螢

ブーキ王階夜色冷

如水月着

牽牛織女星

ケンキウ　ショクジョノホシ

水ノコトク見エルトキ宮女ハヨコ

テコヒノ七夕ノエセラウヲヤレウニテ居ル

明　馮琦

天空露落夜如何漫道雙
星已渡河空ガハレヤカニツユモオリテヨハナンドキデケラ
思フニ大カタ今コロハ二ツノホシガスゝニ
アノ河ヲワタリ玉ハント人ガイフ
見說人間方恤緯可知天上
不停梭ゲニザイ人ゲンカタムケノ糸ヲ星ニサヽゲルケト天上ニ
ハオリヒメガ梭ヲヤスメズニ
ハタヲオラセ玉フト思ハレル

詩　仝　唐　祖咏

閨女求天女更闌意未闌
ムスメタチガオリヒメニ子ガヒヲカケテセタ
ヽツリヲスレバ夜ガフケテモコヽロニハ〻ダサ
ヤウニモ玉庭開粉席羅袖捧
オモハヌ
銀盤タヽヲシイタヤウナニハニテ七
タヽツリノ儀式ヲカザリウスキ
ヌノゾデニシロカ子ノタラヒヲ
モツテ出テホシノガケウツス向月穿
針易臨風整線難ハリノミヽズヲ月カ
ゲニトラスレハナリヤスク風フキテ糸ヲ
シラベルレハ吹チラサレテナンギナリ穿針整
線トモニ七タ
祭リノ故事ゝ不知誰得巧今且
試尋看コヨイ乞巧奠ノヽツリヲシテタ
レカヌイハリノ手キハガアダツ
タノヽヅコヽロミヽ
トフテミタイモノヤ

○七夕手向之詩朗詠之分
憶得少年長乞巧竹竿頭
上願絲多ヨクヽ思フテミレバワ
イ女ドモガマイ年ホレ
ニマガヒヲカケテテキヽニナラフトオモフホト
ニサホノサキニカケタ子ガヒノイトガトカク
オホイ
フジヤ

○二星適逢未叙別緒依依之
恨五夜將明頻驚涼風颯
颯之聲ニツノホシガタヽ別レキハノグドくミタウ
ラミヲモ云ツクサヌニ夜ガハヤウアケカヘル
カシテヽレキリニスヽガゼガフイテクルコヱ
ニオドロキ
タヽハン

○露瀝別淚珠空落雲是
殘粧髻未成七タノヨノアカツキノツユ
ヽ別ノナミダアマヽカ
玉ガムセレク落ルヤウニエルヨアケノ雲ハすり姫ノ子
ミタレガミノミダケタヽダツクロハヌヽウナケヌヽヤ

七日

妙藥妙術

房事を戒む 今日と十五日と

此両日房事を戒めしむべし

白髪を除く法

今日百合の根を煮熟し搗て新しき瓶器に盛り屋の内に掛陰乾にして百日置て白髪の人に下地の白髪を悉くぬきさりて是を塗れば黒髪を生じて白髪をなくす

身面の疣目を去る法

今日大豆にて疣目の上を三度ぬぐい其大豆その人の家の南向の屋に東より第二番目の溜とちに中へ種をくべしその〻夜一所に疣も去るべし

記憶の術

今日蜘蛛一つとりて頂乃中にはめ置べしつゝ能くこれを忘れず事なし

○近年彫刻ふるる物覚早傳と云る書あり甚よろしき本なり

狀

七夕之文

晩来雙星之佳會世間巧奠書瓜之奉女児之事不宜乎併待狂駕

尺牘 昏替并註

晩來 今夕○今宵○此夜○往

辰 双星 牛女○両星 佳會

佳期○良夜○嘉遇○年會 世

間 万国○世上○古今 巧奠

穿針○綵縷○願絲○琴瑟

青瓜 菜奠○終朝 女児 婦

女○少女○妾婦○児女子 宜

平 可賞○愛憐 併待云云

(中)請来弊庐 (上)仰仕顧歩

(上)来遊刮目期

七日毬

△七夕毬○飛鳥井家○難波家鞠の會例

式ゑ今日の鞠い七夕祭の為ふ奥行ゑ出ゑ見ゑ

七日 京都北野御手水

北野天満宮梅松院

の主今暁御本社内陣ふ入献ト又神室乃内の松風乃硯ゑ掬ひ水を献ト御手水を献ト

の葉をそへて備へたてまつる

これい七夕の神詞と天神ゑ

昏き玉ゑ為ゑとそ

池坊立花

京六角堂方丈へ池の坊門人集ヒ二星

△手向として立花と奥行と立花の

当住職専慶法師まゐり初る

○東西本願寺ふ立花あり又

数品の州花ゑ作ゑ物あり是と

△本願寺の鼈花といへり

○天竜寺虫干○加茂松下虫

干○東山一心院虫干○大

德寺虫干

大○住吉虫干神宝おく出る

坂○平野大念佛虫干

江○九品佛桑ゑ

戸○本所回向院大施餓鬼あり

大○石上布留社菱渡の護ア。菱

和を三僧の肩ふかけて行ゑあり

逆峯入

大峯と称ゑるハ即金峯山也宗派ふ本山

當山の別ゑり本山の峯入い則

今日ゑて聖護院の宮ゑり逆

の峯入又逆峯ゑも云大峯ゑり

熊野へかけゑ又本山當山

の御門を入御ふ一度諸人ふ
い秋山ふ入ん十の登山ハ皆御代
参ふ醜醜の聖宝僧正ふ始
るふ委くハ三月順の拳人の処誓

八日　京都　文珠會　仁明天皇の御宇より始めて東寺
西寺にて行ふ　公事根源ふ出

(俳)文珠をや乗るとは見いな　鬼貫

江戸　○同向院佛餉施入の目録現
當両盆乃法事執行

九日　京都　六道参　〈植貫〈植貫〈迎鐘。建仁寺
の南ふある六道の珍皇寺とハる
寺へ参る伝云ふ今日明日諸
人此所ふまゐで聖霊とむらふ
といふて此寺の鐘をハく是を
迎鐘といふ又槙の枝をハくの
ふ持佛堂ふもく俗ふ聖霊
槙の葉ふのうて来るをいい
へり珍皇寺本尊ハ菩師佛へ

小野篁の像と小堂を安置を
篁此處より冥土へ通ひし道
なりとて六道とハふ
(俳)通ふらして来る春も

十日　諸方千日参　〈清水千日参
観世音菩薩へ
今日参詣をれハ千日ふわるとて諸
或ハ四万六千日ふもるとて諸
方へ参詣をるハ京清水江戸浅
草大坂天王寺その外諸方観
世音ハ今参詣ふ河州
野崎観音和州壱良二月堂

十三日　今日枸杞の煎湯ふ浴をれハ
無病不老ハと霊験ハ出う

十三日　魂迎　〈迎火○今処方ふ亡人
の聖霊とむらふとて
麻殆とをうて火ふ焼く是を迎
火と云へ佛家ふ説多ハ
○世間ふ松と門火ふ焚へ　櫂の枝
をて清水をそく車ふすりそふ

火の陽光と以て天の隈の魂と降
り水の陰精を以て地の陰氣魄を
呼びのぞいて亡者の魂魄をむ
かへるべし　盂蘭盆漢土の鬼神を
まつる式をまねびうるものな
らんか

○唐土ふも亡人の魂をひかへ
て官服を着し門ふ出て空と
のぞこ神を導き祭りて了
又神と送ると出る事ありこれ
ら孝子の誠と尽さふ似たれ
ども見ものたくむまん近し
士君子なる人佛者ふまじひ
てかかるべきなれども式なす事なり
と五雜組ふ見えり

（非）於ふ火然声の業分や盂蘭　其有
（狂）見て浄心まことそなれ道家の
むしなるものなれ常樂菴

十三日　京○東西本願寺　灯籠
都　拜見十五日まで

十五日　中元　正月を上元と十月を
下元といふ今日を佳
節とすること少くいとなし
きよあるざれども公式ふ用ひ
られどくくに日本歳時記
ふ見えたり

盂蘭盆

△盆會△盆供△盆
△施餓鬼△盂蘭盆

會の遺風なれども此月の内ハ諸寺
ふて常にも寺ふて行
ふ事あれども
ふて專ら
なるべし○勸善彙纂ふハ蘭
盆法事ふ
のこと代禪家ふて焔口施
食といふ
○釋迦の弟子目蓮尊者の母地
獄ふ墮餓鬼道の中にありて
食もる事を得ずして此日百
味の五菓を供ハ十方の諸佛ふ
供養せしめ給ハ母ふ食を

得ざる経論の意をもつてこの説
をなす事
ようして盂蘭盆会
始まりくいう盂蘭盆の梵語
ふして中華の語に翻訳をしれば
倒懸救鬼といふ事へ倒懸いさ
うさまふかく苦しむ訓地獄の苦を
をいふそれを救ふを盂蘭盆祭り乃
そなへとなすを救鬼といふなり
又救鬼とい救器とかさて救ふ
器なりなりて公事根源に出

○唐土にても今日盂蘭盆会を
諸寺院にて営むへ事文類聚に出

○本朝にても齊明天皇三年ふ
盂蘭盆会を設くと云り日本紀に出
其外委しくい眞俗佛事篇
といへる書ふ出しなるべし

○儒家の説にい今日中元な
る故以て先祖を祭り秋の盛
事を告奉るへしあり此ことは
委しくい歳時記ふ論と故暑に

霊祭

△聖灵祭△聖灵棚△灵棚。十四日より人家ふ
新ふ棚をまうけ先祖の霊と祭
るへ。報恩經ふ云く凶人年ふ
六度来る中ふも今日ハ盂蘭
盆ふあるれば必ずこれを祭る
十四日卯の刻ふ始まり十六
日午の刻ふかへるとなり
△枝大豆△枝大角豆○芋の葉
△昔瓜○蕎麥△昔そば○早
米△昔かさ○茄子△あさがの
箸△蓮の葉△かけ索麺△あり
の実。桃。蒐。右の類祭ふ供ずへ
△此印の多い季ふなるなり△
まるーるなれかもまつりの心と
ようこ合ふれい季ふるべし

(今)羊中行事哥合　前大納言

あるとやくのはきもとるふん
たまなるてゝ人姫月のうばゝ
(月)冷おもも時水鳥ーヨ祭り嵐雪

吳祭々ふも燒切のくりゐ　芭蕉
棚經や声の高さは　其角

（狂）くろ入くゝ　敲えるれく　吳棚へ
をゝかけ　ゐはは　ゑ　ゐ　　陀人

棚經

今日其家の旦那寺の僧來りて吳まつり社前ふて經とよむ是と棚經といふ

（俳）棚經やこれ曉ふ阿闍の水　其角

鼠尾草

（異名）長くして水をそぐふ便あれい名づく　全躰熱と治し渴と止るゝ本草にも見えさ

ゞ渴と止るゆへ饑鬼ふ水に轉ぜふ用ゆるとぞ○七夕の外ふも

水ゐけ草と云るあり稻のこゝ
くゝをれども今日のこゝ外州
いこゝをゝゝの事なり藻塩
草ふも出又千梅子の説も同し

（雜）藏王　ゝゝれゝゝゝ
水かゝゝまのはゝ
はものまふく

墓參

京都ハ七月朔日頃より十日頃までふ墓まゐりをるゝ○大坂ふハ今夜亥の刻頃より明朝へゐけて千日ゝびと小橋等其外七外の墓處無縁の者參詣をるゝ是と七墓廻りと云○唐土にても今日先祖の墓と掃除して供養ゝゝ

玉箒

（俳）おりて庭拂て　康吉
ゝゝゝゝゝゝゝや玉箒

生身玉

△荷飯。糯米と荷葉ふ包こ吉祥蘭と引て上を括て贈答て生身魂と祝ふしいゝ

○今已人と祭ゐ吳祭しいゝ生る父母と饗應ゐ式生身魂しいゝ此月公家武家ともふ世ふ在ゐ尊親を饗應ゐゝ事ー紀事ふ出ゐ

（俳）ゝくしたるゝとあゝむゝ　芝の孤　夜靜

△差鱠　鱠のせ二尾と合して盆つけ一刺と云是

△蓮の飯と親族たがいふれく

て今日の祝儀とす

(能)ぜんそ鱠の骨多のそそ生多金方山

利鱠やうれてもも夫婦つれ其角

△夏昏納め。今日より夏の終なり。○僧

△解夏　徒四月十五日より夏ふこもり内へ

佛経の類抔昏写を故夏昏納も

又夏解とも云ふ尚四月十五日の所

又夏の十九丁メ等見合もべし

△解夏草　夏ふこもり曽夏篭

終なり絲と以て節と

束ねて且家へ送ると云出す。○一説

ふ吉祥中のこゝへしいり

○歌民要覧日唐渤右の僧絲と少て

節と束て且越ふ送る是て夏詳中と

今此中と詳ふ也ふ五部の法

身の座とする名つあて吉祥中と云

十五日

△安居頭　昔八幡ふあり今明日

八十二月十五日討あり

江○弘福寺施餓鬼。法華の

戸後相撲あり○白金瑞聖寺

本所羅漢寺施餓鬼

○麻布普福寺藏王權現まつり

大○天王寺講堂一夏の結願へ

坂○住吉盂蘭盆會角力あり

都京○智恩院山門施餓鬼あり

○新善光寺阿弥陀開帳

泉涌寺の内ふあり

○岩屋不動千日参今明日

十五日

江△三井寺女詣　常へ女人禁制の山なり

今日一日ハ女の参る事とゆるす三井

寺の訳ハ委しく博物筌ふ出ど

近○淳御堂法會○志賀郡堅田

江七月十五日より同十八ヶ法會有

国俗今日親戚を会し人遊樂

十六日

と事事毛ヶ十六日ふ筌

天氣 今日の雨と滝新聞に名付夢又来年に成の兆く
を○今夕月上るゝ早れ晴で
く月上る事遅く八秋雨多し

十六日 **水灯會** 字治黄檗山の僧字治川に出て修行す

十六日 **施火** 送火たくさもつて
△大文字火 △妙法の火
△鳥居火△丹形火○京洛外乃
山々まで文字の形ふなく木と石
てやくさう其間一丁二丁にも及
ぶ人鹿谷大文字此筆画甚よし
市原山のいの字松ヶ山の妙法
の字西山の鳥井の形西加茂の
釣舟そは外東西北處〻乃
山々まあまゝくさあり甚見事
なる事さうらんを送る火
又施火いもつよう

送火 魂迎ぜ 聖灵と送るゝ
△河邊ふ麻柯と燃そ

京都の俗ハ今日ハ大坂ハ
十五日ハ其餘處ふよりて變まり
(俳) 送り火や三条過ぎて大文字 其角
大文字ふ送せて流せ雅波川 三惟

京都 祇園魔祭 今日と焔王の縁日寺
△京本焔魔堂参詣

松ヶ崎題目踊 松ヶ崎妙泉寺
堂の前を甲
女うちまやろ題目ふ姉〻と付
ゆて声れ〻〻くそくるゝ
○山崎宝寺開帳○北山村石不動
参○紅森念佛踊 昨今西日

江戸 ○焔魔参○増上寺山門開
○雑司ヶ谷をまゝ

大坂 經木流 天王寺亀井ふあり
△人の戒名法名と記し亀井
の水を手向ゆ事ふ
今日經木の表ふ

十六日 **新綿** 内裏へ貢の綿を
△則真綿

(雲) 大木

[illegible]

○右證歌と出をごく真綿く

後ふ永禄の頃より初て木綿い

舶来ー故證歌と時代大ふ相

違せる事と見つゝ能諸の

季寄集ま九月と出ー三秋

ふ渡るくいふものい藻塩草を

見ろ誤ろ事ろ七月十六日ま

定ろ事ろ○新綿と

して九月ふるる事いろーる

まぐきまや尚九月の際まろ

を見ゝ所ー

十六日 △衝突入 伊勢の山田ふろと

ろをべて人の家

ふ秘蔵ろ物と見ゝれを

思ふ所ふ今日其家ふ

入て見る事ろ往昔い諸国

ふもあしかど今い絶ろ○今

摘伊勢山田ふ日の光れ名号と

て圓光大師の御筆と出ーて

拜ま寺寺ろ此日近辺乃

寺院も出ぐ〳〵ひをそれ突入

の餘風ろ〳〵ぞ

(能) ゝそ又や大ろろと吟ろ 波由

十六日 △鷹塘出 四月ふ孵ろ時

鳥屋ふこめ置て

七月中旬新毛と生ろる時塘を

出を今日塘と出をを 藻塩草

○貞徳曰鷹羽出揃ひる時夜

分盆の聖灵會の著ととりて

塘より出を故ふ〳〵鷹ろもふ

(雲) 雲ふ〳〵やりろ〳〵かつ四めく

ゝ紫〳〵せろゝやをろ〳〵 定家

ろの所ゝを秋ふ月ろ夜ふ月ろ夜の

月夜の所ゝろつの〳〵ろより 定家

(非) 非ゝ夫の片ろやろ〳〵ろ子ゝ 三惟

十六日 妙藥 三戸虫法 庚ろの日ご

〳〵手足の爪と切ま

七日 日今

ゝり熊ゝ置て今日灰ホ皆ノ水ホ
てゝむべ一枚そのち一度庚申を
守きゝ三尸虫と伏ー押へて天上
へ到らーめず七度庚申と守れ
ハけるホ三尸虫をくろすよー
徐春甫ガ古今醫録ヌ北帝
玄経と引てくへ
ー〻〻説くゝ

十六日 赤壁月

今タノ月ヲ云○宋ノ元豊四年蘇子瞻

東坡居士ト号ス 今日赤壁ト云フ所ニ舟遊ビシテ賦ヲ作リタル故事ヨリ起レリ

賦 古文真宝 前赤壁賦 東坡

壬戌之歳七月既望蘇子与客泛舟遊ニ赤壁之下一清風徐来水波不興舉酒屬客誦明月之詩歌窈窕之章少焉月出於東山之上徘徊於斗牛之間下略

○既望ハ十六日ノ事 蘇子瞻此日客人ト共ニ舟ヲ赤壁ノフモトニ浮ベテアンブニ清キ風ガソヨクトフキテ水ノ波モタヽヌホドナレバ盃ヲトリテ客人ニサシ月イデヽ明ラカナリ窈窕トシテタヲヤカナリトイフ詩ヲウタフト云コヽロナリ

十七日 京都

○壬生寺 六齊念佛アリ
○上京小川本法寺 虫拂

十八日 京都 御靈御出

神輿今月御旅外ヘ御出ク
祭リハ八月十八日ヘ廿日ヘ間御旅外ホ
御鎮座ヨリ安ーくハ八月ホ出ヲ

十八日 宗祇忌

俗姓ハ飯尾次郎右ヱ門
と称セ一人ヲ紀州ノ
武家ヽヽが世と違して薙髪ー
京師ホ住ー生涯ヲ雲水ホま
ク行脚セ人ヲそりもろ
連歌ろ達人ナリ

十八日 文學上人忌 行狀委しく博物筌ゐいでゝ

廿四日 諸方地藏祭 今日地藏を祭る事は是又扶陽の術ふして秋の金氣を扶ぶ為地藏を祭ることゝ殊ふ石像を祭る事は神道ふ石をまつるふ比諭しそめゝゝ訳ある事うゝ

京○六地藏參詣。加茂。山科。都御菩薩の池。伏見。鳥羽。桂村。已上六所○愛宕山千日詣○町々地藏祭をなす作り物をなす

○大坂うらぶ堀詣地藏祭分て賑ひ

○河内八尾地藏會式うゝ辺郷より群集す廿三日廿四日大市あり八尾のかゝて市又蠅市もいと

あたご火 摂州池田伊丹ふかい彼地の愛宕山ふいろくれ燈籠提灯と影ゝく燈して祭る人其火光迫郷ふ映す

鷹山別 鷹の親子巣と立ゝうゝ諺ふ曰鷹と飼ふい諏訪明神と始ゝ廿七日御射山祭よい鷹も詣ゝる故廿五日ふ巣を締をせゝうこの事おゝゝよ論あゝくいゝくい補遺ふ知明と

(能)岩をゝ別をゝ もゝの眼ふ芭蕉

廿七日 信濃御射山祭 〈穂家作りの御神事うゝ

信濃國諏訪明神此日薄うて神殿をなる其外人家も祭りの程いとゝゝゝとゝくうゝとゝきとみをゝくゝふむゝゝい勅使あ望御狩ありて鷹とつゝ

(分)かりてふく秋屋のゝ山なまよ年やは鷹るゝゝん定家

(夫木)鹿ゝさく秋やの四ゝの一むゝふ

ゝ里あの秋のゝさ山 盛久

(能)ゝゝ文い神も為ゝふ 日ゝ許ゝ

月令

此部ハ七月の事ヲ集メしるす

△攝待　△門茶　往来の人ハ茶を施す　つゆ

の事ハ仏祖統紀碧巖録等ハ出て唐にも古く有来るこゝにこ本朝の俗称ハ有あるに攝待の事い常にもあるも此月初より廿四日頃まで專ハ有り

(俳)攝待の茶にも茶とゝ名れ道之

△燈籠　△高燈籠　△こうろう　燈籠　△きろう　△船灯籠　△花燈籠　△廻り灯籠　△軒の灯籠　西ハ　△折り灯籠　西ハ

燈籠　影灯籠

事とする月ハれい佛ハ供する為設るへ多く十二三日頃より比月中より寺禁中の燈籠ハ十四日の処ハ市ハ大坂ハ藝處ハ十五日も十二日より十五日まで燈籠とする

(俗)七月十五夜月ハ名ハ西行

いそ我今宵の月ハ月ハ月とそ人て

おそ天の山路の人をてらさん

(俳)あるハ行つく此る灯移竹

紙巻と名それ灯籠の長家ハ五里

踊

踊躍ハ遊戯の長こう本朝神代より有りのこれり

(俳)朝夕ハ見る子見さる踊る豊後

(狂)そやしめる踊の庭の灯籠を

とりて初も小物切籠そし　近吉

花火

炮術家の餘興ハ

△物るり家々其藝々

ユとする人出て種々の形とする

(俳)行る事ハ嬉しきもの咲花火ハ半夫

(狂)此火入さてい小町ハ醤油ハ

落生ろう花火せんかう　負山

秋扇

△扇置　△扇をそる

△團置　△團をそる

(連)風とるハ紙の秋の扇ハ宗祇

(俳)ろう紙て出てもそ　徹

(ヨ) 夫木　定やい

秋の扇を詠ませられける　王昌齢

(詩) 秋扇詞

芙蓉不及美人粧　水殿風来珠翠香

水ノ上ヘカケツクリニシタ御殿ニ井テ玉ノカンザシニテガヤウナ香ニ匂フヤウナ

却恨含情掩秋扇　空懸明月待君王

セシモナクソラニアル月ノヤウナ扇ヲカザシテ君ノミユキヲマツバカリジヤ

京都六齋念佛　京師下ロ茂の東千菜寺ハ豊大

△閻の御時六齋念佛免許の状給はれり。○盆中近在の農民太鼓鉦笛と合奏して六齋念佛として洛中を歩行て和州ふも處々ふあり

△ことし使△童を

△相撲　是ハ三秋

△辻をもつて日土(漢名)角觝をもつぱらと互ふ力と争ふと云

古訓ふをもつぱらとしていふ俗ふ称ちわゝといふ心の言葉ヲ

又ハ相撲をゝ文字ハかくゝ

○禁中ハ二月三月の比諸国ふ使をたゝかはされて力者どもを事と部領使といふ叔相撲の節會ハ天子も御覽ある事ゝて先十六七日の間ふ召仰ていふことあり廿六日ふ内取ゝて憤鼻の上ふ將衣袴を着て勝負ハ廿九日まゝでとゝをぐゝろ者ばうふゝすゝる人今諸社の祭ふ相撲ゝ取るゝい禁中の節會ハ春日をゝ給りゝうゝ始まりゝ

(ヨ) 年中行事哥合　女房

かくさまれてことゝ彼のつそきゝ

久人のあよいの為とかりゝ

(朋) 朋本数人の四し懐　衡天　二両

時令

初秋 朔日より三四日をいふさと和哥にいひろくよみて七月をもよくいふなり

(哥) 千載

秋は来ぬ年もすぐるぬとや
萩ふく風のおとろかるらん　寂蓮

今　初秋衣　為尹

小萩ばかさゝもあへぬ吹にきり
まゝ〻ぬ一条の秋ぬれそめ〻る　金槐

海辺初秋　鎌倉右大臣

雁なきて物をぞ思ふ秋はあし
ゝ上の涙乃うゝの汐乃勢

(詞) まゝ〻洗き秋の色。秋を覚ゆ。秋。初て涼し。かや原。淋しき。岩の松風。今始を涼しき。さゝ小もるき。雁むとゝ。むら〻〻風に分かむ物の初風。松のあじ。初秋風。萩はまる。

物と初る萩には葉ゝ松に風の音ゝ。淋しき桐にはおち初る。相の一葉露に並初る。物と先しる。袖の雫霧に雫ゝ初る

扇に扇と雫と並ゆる葉にはをむら〻ちの色ろ宿にもさゝで

秋来る。薄には穂ふいでそもる。

浅幕原には雫おちそもる

柳　柳相は初物ふ一葉ちゝと先

山　山あし風すゞ秋の処ゝ故事あり

の糸物をゝ雫をべゝも外やま

(俳) 初秋むかうゝ紙縄すゝれ嵐雪

(詩) 初秋五字對句　同上

軽風換炎秋　圭月秋先冷

明月流素光　蘋風向晩清

(詩) 初秋七字對句　詩礎

地接邊関冷　動秋聲

樹翻烏鵲 明月 ツキガサヤケシ

カサヾギカヽデ月ノヒヽリカサヽレイ

詩 初秋詞 五言律 元鎮

且暮巳凄涼離人遠思忙 アサタハヨホド

ヒヤヽカニナリタルユヘ旅人ノ故郷ヲ思フ

夏衣臨

オモフコヽロガセハレウナルナリ

曉薄秋影入簷長 タヽツ衣裳ノヽナレバ夜アケヽヘニハ

ハタウスニ覚ヘルニ夜ガアケレハ

前事風隨扇

秋ノチレキガキフカフ入テクル

歸心燕在梁 スキサリシ夏トハ風ノ扇ニシタガイテウデアトモナ

ク古サトヘカヘリタイ心ハウツリニインギニヨセギウ

アルツハメヲミテモウラヤヽシイ

慰勤寄牛

女河漢正相望 五三逢セヲ待テ井ルヤウス

デガワガミツクサレテオモヒヤラル、

殘暑 △のるあつさ。七月のちゞ

先より殘暑といへ

詩 秋風の吹もつよくなる表當ス

夜のくきの枯るるを 石家

連 暑さ日ぬるゝ汗や進よ手 嘯慰

俳 久月ふ流ゝ汗や進よ手

雨ゝ上の付ゐふ拂る暑さくる 斯

詩 殘暑七字對句 詩林

暑氣尚能凌白羽 秋光早

アツサハヤハリ鳥ノ羽ウチハモヽケズ アキノケヽキハヤレ

風聲不肯入清商 夜色闌

フウセイズアヘテイラヒイレヤヒシヤウ ヨルノケヽキガタ

ゼノヲトハヾタ秋ノヲトヽヒイラヌ

餞暑 送去餞ト云暑の去さハ送

△ る意ヘ故餞暑と云 文選

稲妻 光てあつて雷なくる

△ いなつま

いつも同しくくるれども いなびかり

ときゝへて雨雜ぐれる空ふ

光るハ秋のそゞ光にあつこれい

風雨ゝよ淋ゝ季夏甚

き陽気秋収斂の時ゝ

地中ふ伏せんとするやうに陰陽

相ゝ合て光気とあつ

季秋巳後ハ夏の陽気收り伏

るるにより、ふゞまゝ。○晴て

ひるハ風雨

始暑

て光るいほでのいつのまにかなる外
立気うそ長　はるゝ

(歌)秦　山田もるすこく庵のそこねふ
いなつるまもる　牧の夕れ　寂蓮

かつ〳〵きやこうけふ光るいろもを
山ふ〳〵むらつ火かくそこれ　兼昌

(詞)あつい。やすい。新さる。うる。そ
うなれ。質に青は移妻　雲に雲の
そぶま。雲ろ露に金りもそぬ。
うる。ぶ立ちるき。渋茅　夕立に
涼し。○無常　あたのるき外山。桜。
あをる葉。かつ〳〵れ。れすゝき。

(連)いなつまい雲ふ打出を光る紹巴
〳〵のまもるえかる牧とれ芭　玄仍

(俳)移妻とくふろ家の紙帽芭蕉
あれをい移つまを絡たりル　仝
移つるや住居の松仲の〻　徒然

(狂)移つまのこそえぬ拙き孫木の
子来の移こ入まてれるもの　貞雨

(詩)稲妻五字對句　司上

・爛迷星少色・照天飛火鏡
ランメイホシニスクイロ　テンヒトビクワキヤウ
ヤウラクトシテ星モナキヲ失ヒ　ヒカリハ火ノカゝミノトブヒエ

晃奪月無光・横漢斬金蛇
コウダツツキナシヒカリ　ヨコタヘタツミニサイスキンジヤ
ヒカクトシテ月ノ光ヲウバフ　天ノ川ニヨコタハツテ金ノ蛇ヲヒカヤカス

秋初風

(歌)○立秋の詞ふきのうろ色
亀山院七百首

〈今〉約の〻ふ秋覚浮き玉紅
ひとよふたちぬ牧のうろ風

秋涼

△新ふ涼し〻△初て涼し
△あきすゞし。秋ふるりて涼き心と云
○礼記大全馬氏曰涼風至ル
い天地の仁気散ぶとしいろ殺伐の
時候ふるうそ　ぬうろべし

(哥)月清　野月露涼　雅経

神の上ふ夏初月の色るう
はる吹張ハ世風をしき

(詞)暁ふて。秋とるする。夕く
き涼し。ふ〻ふきむをふ。名乱
の風。風の

入。風うつる。雁きたる。初りつ。三

のたまくれ　　七月廿六

(連)涼しそうれいの山　社の風　宗祇

(俳)盆おの涼きいの山　額引　宗奥

(詩)秋涼七字對句　　詩礎

濯残暑氣朝来雨　三伏冬

助我秋声夜半風　一涼新

△初嵐　△初嵐風。初秋の末より秋の中比まで乃

△八月中秋の嵐　嵐と云ふ○嵐と計り連俳ハ

雑部　△初嵐として秋ハ定む

△ふくい春夏ハ陽気上昇する

時節故吹風もおだやかなり

秋より陰ふ次第に強る故吹風

も秋冬いあらし故ふ初の字

を添て秋の季とす。青嵐ハ夏

(雲)夫木　　慈圓

秋風ふ萩の上紫もみぢくて

あらしふうるるくてそるるき

(詞)嵐ふうる。礼きあり。邪分。い

うく吹。あらき。吹まく。ふる

びく。つくさはまる。やまく。

(連)はやくはるるく吹き寄初嵐　束硯

(俳)秋入そる荻らす嵐の秋さび　保久

冷々　涼しくよりハ重く

寒しいよりハ冷し

(哥)雪玉集　　實隆

かくく夜所分の名さの朝さむる

秋冷しき花てこそ　そく

(俳)をきまれ河の数の古ふる　芭蕉

秋色　艸木山川ともか色を

あらたむるとて

(句)夜ふかうれてもそれ秋の色と

ちりてそきろる物哀の花　顕憲

二百十日　立春より二百十日め

をいふ　今日の風

七月晴雨

と恐るゝ二百十日は早稲の花
さゝり二百廿日は中稲二百卅日は
晩稲の花盛りゝ是より後は
花ちり実ふるゆへ風吹ても
稲はさゝらず稲の花は中に水
のゝ白きもあり是米ゝ
なるゝ風ふけは此水と吹ちゝ
をふより米出来ざるゆり雨
ふれは此水を花ゝはゝむけよ
り風ふれてもさほど害をゝ
さず雨なしの大風を恐るゝ
は東北より吹を大坂ゝて上げと
ゝ此風吹はのゝ山べひえて志け
はゝり西より大風ゝて吹ゝ
ゝより是をゝゝ〇東南の風と
いなゝ或いいせちとゝゝ
ゝるれども是もふさつのれば
大志けふるゝ風は雨はゝるゝ
ぞゝて吹ゝ雨ゝふれば
ゝの事なゝ大形は雨ゝふり
て出さゝるゝ〇西北より吹と
あゝせとゝて日和ゝ西南を
沖氣といふ曇りてゝゝれ
ども日和ゝ出せは此日和は長さも
のゝ西より晴てゝるかゝ
は沖より雲をつきのゝて雨
ふるゝ此風吹はけば日和も
曇りも雨もゝふゝ長くゝ
りのゝ〇申酉は右より吹とま
せといふ日和ゝいゝ〇東ゝ
ゝ吹ゝゝ西より吹風にゝいゝ
といふ風あり此風は地へふゝ
ゝて其所より風次第小ゝ
きゝゝゝゝ大風ゝゝり稲と
損ずる事甚し雲ありて北
風は雨を法ゝゝる哥ふも秋
北とゝゝ秋は金ゝり北は
水ゝ金生水の理ゝて雨を生ゝ

さくらえだにも夜晴て北風い日和よ〜

草木

七月の異名を集むる内の異名なるべし紀を分ち八月ふも相ひ又秋三月にもまたるるのよう

楓 〈青楓。本名を雞冠木。くるまの車ハ蛙の手に似るゆへ名づくるなり。葉なるゆへ名づくるなり。種類甚多〜

異名 丹楓。紅楓。霜楓。詩錦。○和國乃楓し唐土の楓し大ふかくこち異なり。葉ふ三角あるて両様なるべし出る

唐楓

和国京都高雄楓圖

〈かへで。ひさだ。そそ。まゆみ。これ類紅葉をなるゆへバ九月なり人〜く九月草木のそそ後ふしるす

万葉 我宿ふもとの楓ろ毎ろ見ていもと少〜日いな〜

俳 紘田川ふ花ろ散まくをしみぬはゆ毎ふ山ふ楓の子 芳室

風ふちらぬさふ散ぬ楓 芭蕉

春楓ふ蛙さへ紅葉ろ非 五風

狂 まつまきい絵ふ有るゆ竜田ふ紙えて散入ろへ去ゆ 負室

楸 キサケの異名 又雷電桐ともいふ此木雷除とする故○さゝげのごゝ長一尺許の莢枝の間ふ垂る皮蘚のごゝ

異名 木玉。實名楸。梓。椅榎。ゝ〜ゝ少〜てかゝれ種類多〜。こひさだ。そうひさぎ赤芽柏。あづさ。河原ひさだ等諸家の説多〜人〜くの補遺ふ出とゝ〜

万 大木ういゆの欲ふ楸ふるきよれ河ふ多ふ多ふ馬尉

附 取ゝそ人ゝそ人ゝゆ楸ふ馬尉

柘 柘の屬なり実は渋くして食ふべからず暮秋ふ紅葉をなすも色うるはしとよろこぶべし

(万葉) 山ゐのの石間ゆ出でくる水の底ひ清みかもの子ちゆくらん 宇合

(連) ちぬぬり柘榴色なる柘紐巴 提河

(俳) 柘榴は柘の男のそはふちり 提河

檀 文字たしかなり唐土にてはこれ沈香或は白檀の類にて日本ふあることなし今はてまゆゑといふものはあきぐて枝は矢の羽のごとく花物あるとて其羽にをまるこれ物産家説に見えず陸奥にて紙ふ作る物此木ゑ

(万) 春のむを岩垣ふ生ふる色ふかしこれをあしふきせもるる 顕輔

櫨 〔字名〕黄櫨。天子の御袍これを以て染る故ふ黄櫨

染くるは三月ふ白花を開き秋ふ紅葉をなす漆の類なり

木槿

花は朝ふ咲日及。舜草。

てタふ隕る故ふ槿花一日栄ゆ今能諧者流槿と

あさがほ混ぜりむ

きむくげと

しとなり次乃万葉集の

哥にて知るべし

(万葉) 夕かほはなにさそはれてさきにけり

○是むくげの事なり古名

朝顔なる事なるべし

(俳) 日は筒ふ生なる木槿ふ芳室

なるとみてはなしむくげ杉風

朝貝 蕣又牽牛花とも昏く 斤生 敦種の珍花を出

〔一名〕假君子。朝花ひらき

辰の時ふ花ひらぐ蔓艸なり

(多)浦風ふ治やかゝん終氷
ゝいかゝの石の釣船乃とゝる　顕季
(詞)花の釣を　春の釣船。ふゝ
の恒縁。仇なるもれ。一説。夕
か者ゝまゝゝあ。志の先ゝ。ア
ゝとふかゝる。さかりゝとゝ。
家ゝいもちゝ。
(連)むゝふ日ゝゝき釣船の後ふ宗砌
(俳)蕣ふつゝべゝれてゝゝひ水　千代
蕣のせゝゝく咲て浮世ゝる　常牧
(狂)釣船の家ふなゝゝ人間も
家ゝゝ命のゝゝ釣おゝ　僧一道

秋海棠

異名 爛腸草。断腸

花。ゝく海棠ゝいゝ名ハ海外ゝり
来る故名づく

玄及 曾及。五味子。蓽を
美男ゝゝゝゝ堂上方
まそ今も水ふ浸ゝ絲まゝゝて
髪と結ひゝゝゝ地下及ひ民間
ひも元文寛保の頃までハ此製
残ゝり　鬢附油さんふゝりて
ゝり玄及と用る人ゝ只雲乃
上のゝゝゝり花ハ三月実ハ七月ゝ

桔梗 蛾のひゝゝゝ。いゝゝゝゝ

(俳)桔梗の花咲ゝゝゝゝと云ゝゝ千代
桔梗の色老ゝの涙ゝ寒竹
(狂)ゝゝゝゝゝゝゝ桔梗の染物や
色あゝゝゝゝゝゝゝゝ来門

澤桔梗 葉ハ山丹ゝ似て少し
短く又桔梗のゝゝ

く大ふゝて花碧ゝり根白ゝ沢
中ふ生ゝ長く生ゝるゝ又浮
蕎花も沢桔梗ゝいゝ
(俳)沢桔梗花の色ゝ茶雷

蘭 京師の俗ランゝ称ゝ
野ふゝる物ゝゝゝ
の葉ゝ似て切叉ゝ薄紫乃
花ゝひゝく香ハ葉ふゝり蘭ふ

三種の異あり漢土の古蘭と
いふものハ今の茶蘭なり和の
藤袴と称する物ハ本朝の昔
より蘭といふ物く和漢近世
蘭と称する物ハ建蘭なり
次ふしなり

(秀)古今　敏行

行人のとめよと色ぞ変りける
秋ぞ物とは思ひ知りける

夫木　匡房

かすみ立ぬ春の初ぶの蜂ちるま
み代の秋まで白へとそなる

(俳)焔丸の外へと堪す　菜　支浪
一月残れの巻ろ紙とうぜ　声可

(杜)ちるとなれと春ハまはるまくやらん
白ひもちるさ義とるなり　貞徳

建蘭

数十品あり其佳なるもの価大ふ貴し葉長く麥門冬ふ似て一二尺花ハ莖を抽で数花開く蜂ふ似たり

(俳)業ハ知ハや柔枝削て屋敷る巴静
ざる若とこと匂　喜左衛門

(狂)塚ふ似く屋敷てまるれ若れい
厠のそふ白ふるるん　喜文

女郎花

いすへい大ふ覆ひ

この根酒のムうるる香ハ花ハ人のよく知る処なり哥
によむハそで女ふたとへて恋哥
ふ尤多し　○俗敗醤と混ぜり
偶よく似るを以て誤まり敗
醤ハ毒花家　羽衣と云花し

僧正遍照

(秀)古今

名ふ知そそ女郎花
ふれ落ると人ハかるる

○此ふくい遍照ハ奈良へまる
ふくるとなれとことよりそそ
ふくしをとふくよそそ

千載　女郎花蘭風　雅兼

ふくるくしなひくとそれい牡風の

吹来る末も[illegible]

(連)[illegible]

(俳)ひろく[illegible]芭蕉

[illegible]

茶の花

[illegible]

べ[illegible]

ふ男べ[illegible]

[illegible]

[illegible]

ず按[illegible]

[illegible]

[illegible]

(俳)[illegible]

男べ[illegible]

(狂)男[illegible]

[illegible]

仙翁花

(一名)紅梅草[illegible]出

花の形がんぴふ似う

(云)蘭塩草

[illegible]

(俳)仙翁花[illegible]

観音艸

用藥須知[illegible]

祥蘭と昏う

花いうま[illegible]

[illegible]穂をるす

(俳)[illegible]

翁草

初春苗と生ー葉麦

門冬ふ似て甚白く白髪の如

し故ふ号く花秋へ三才図會出

(云)散木集

[illegible]

[illegible]

(俳)[illegible]

弟切草

(漢名)[illegible]奇奴州[illegible]

師草の青茎○花小黄[illegible]三

稜の莢とむ[illegible]中ふ小る子

あり○青茶又茶師草と名づくるハ此草金瘡の薬になるゆ故なり劉寄奴にくれと花れとも茶能ハ一やうして花葉異なり

(哥) 鷹百首　定家
秋の野にまさ枯のこる青茶卯ふてふ鷹やさしねぶらん

(俳) こゝろざしさよ茶のうき初のこぼれ茶　五鳳

(妙薬) 疝気にハ陰干にしてせんじ用ゆ○血こあ切こ水にハ此薬と陰干にして粉にし油にて付る○此薬をもみれバ汁出る是一切の金瘡又ハ腫もんにつけてよろしき妙あり

△益母草 (一名) 茺蔚○莖胡 麻に似て葉ハ麻に似よう節々に小花を開く実あり婦人の病に功あり故に益母といふ目を明らかにし精を益を故にめはじきの名あり

△萩 ○波木△糸萩△白萩△小萩 (異名) 胡枝花○天竺花 花史

(和名) △古枝草 蔵玉△鹿鳴草 和名鈔 ○初見草 蔵玉 庭見草 蔵玉 月見草 藻塩 野守草 同上

冬も茎かれずして春葉を生ずるを木萩といふ。冬葉茎ともかれて春新しき苗を生ずるを小萩と云 大和本草 △糸萩ハ花紅なり△白萩ハ花白き花なるべし奥州宮城野に萩多く生ずる山なり其内にハ白花あり又白紫咲まじりなどもありとぞ其外詞の所に△印あるハ季に用ゆべし

(哥) 續千載 我袖ハ萩の下葉にあらねども そよとふくにも露こぼるらん　俊成

玉葉 乙女子がかざしの萩の花の枝に 玉をかざれる秋の白つゆ　為家

藻塩 世をいとふ心もさそふ萩が花を 野辺にてりつゝ見る

蔵玉 さかりの後も色ある古枝の秋も花ハ咲なり　西行

詞 咲。匂ふ。ちる。ふる。風ハ花ちる。
霧ハはらふ。霧ハきりぬれ雛の萩。萩。古ハ
吉里の萩のみき。衣ハ秋萩の花もとり衣。
萩ら花をとり。かどにハ乙女ら花さーの萩。
〈萩の湯〉萩の葉とみきにたんさるなり。秋の
萩ら。紅ゆゑふ湯
〈女ゆゑの萩〉萩の古枝ゆゑ。古枝ゆゑ。
枝〻もてハ〻〻きもへ名づくくその四ゆ大小
あまバ小手紀をなゆゑゆゑの小萩といふなり。
〈萩〉萩ハ萩をゆゑ。萩をさろう。
〈月〉萩のうハつゆ露なる
〈七夕〉七夕の七まのひ
〈庶〉萩ハ庶の書といふ。庶ハ萩とて庶の縁あり
庶の花書。庶のまゆゑ
〈恋〉紫ハ恋ゆゑ。恋ハ紫ゆゑ。
〈禁中〉〈萩の戸〉萩屋などよめり
春く秋の三千世すゑ出
子 こまぞだすまも
なせるゆゑ医

哥 あ〻き風ふせき〻〻ゆゑ
こゝ紀ゆ〻〻を考門そろ紀

連 ゆゑ〻ぬを重ね此柴の小萩ゆゑ宗祇
花もまゆ〻ゆゑ添 萩のつゆ 肖柏

俳 白雲もこゑゆゑ萩のうねゆゑ 芭蕉
萩の花咲とゆゑ目を紅をとろう 禹洗

鳳仙花 金鳳花 又ゆゑ
とゆゑ。花紅白あり
花のかゝち飛鳥のゝ〻又鳳の
ゆゑ〻〻ゆゑ物の骨を解を故ゑ
骨ゆゑさの名ゆゑ 三才圖會ニ出

俳 風仙花紙の型ゆゑ 無名氏

詩 鳳仙花詞

細見金鳳小花叢費盡同
花染作紅 ヨクゝ コガ子ノ鳳凰ノヤウナ花ヲこレバ
ハナガアツマツテ咲テアル花ノ色ハウルハ
こレイベニヲオレマズイヤシテコノヤニアラ
ウ染タモノ
テアラフ 雪色白邊袍色紫
更饒深淺四般紅 ソノハナノ中ニ
ハユキノヤカラ
白イ邊ガアツテ大臣ナドノヌサルハ
ムラサキノハウノヤウナトコロモアツテ
コイトウスイト四色ニソメワケタ
ニヤウズノ手キハカ見エルゾ

旋覆花 野徑の水溝乃邊ふ
多〻大〻一重〻
重瓣の中の甚少〻せんへの
物と号けて水慈童と云花

ハ野菊の黄うるがごとし

異名　滴露金○野油花

△野菊　鍬押蒿又野粉團と

いふよろ菜に似て莖か

〻　救荒本草ニ出又春ハよもぎと

いふすの秋花さくと野菊とも云

△やいと花　葉ハ女蔓に似て花々

筒ざくなりやはら

かうるほるくさうり小花いろ

白く内をとしく紅く小児この

これの莖つきのかく岔上ゆ

て身にあてゝ灸のまゝとする

にゝく似るゆへ名づく

△曼珠沙花　和名　天蓋花○燈

籠花　漢名　石蒜

異名　烏蒜○老鴉蒜○水麻○

蒜頭艸○漢々酸○一枝箭○葉

ハ孤のかゝるけしく花ハ莖と

ゝもゝんて五六朶いろゝるゆ

えのうゝ糸とむとふがあるく

（俳）ゆゑにも結ふ恋ひ乱れ　其十

△常山花　葉ハ梓樹に似て

ひろく甚ゝさく

（俳）これも又父母の恩あるやうに花　立圃

六月花を開く七月ふハ此虫

とるうり常山ゝゝ苗乃名

蜀漆ハ根の名なり

（俳）見てそれハ老山の花もろさを　李坡

△頬桐○ひきうり。葉大きさ五

六寸ようして皺あり

△蓖麻子　和名　あうとま。かゝ名

○かゝうゝハ

△渋柿　渋柿所々にあり○渋取

法又渋紙の仕ようハ

しく日本歳時記ふ出ぜり

（俳）渋とりや仏名の煎すしとゝん　岩翁

△茗荷花　七八月根のかさにふ

子と生ぜ即花ゝり

△鬱金花　異名　王金○葉ハ芭

蕉ふ似ゝり花白

質紅へ深色ふとろい此根うり花いろのとうふ似て甚大うり

(俳)とうがらしもろかせうりとうがらしは憶ぐくい 言水

△薏苡　仁ハ穀のぜんゝ粥とす喰ふ又ものを法ゝ多くて念珠とうすいろこの名あり実ふとうて季ゝせう

(俳)今年糸り先一粒を芋と成粥 玉瑞

△蒲萄　(異名)蒲桃○草龍珠○北国ふとくて夏ふて棚を延ふ実と以て季ゝすに二種あり一種ハ名びぶゝと云

△紫葛　(異名)ゑびづゝ山葡萄と云ふ月のうり袍の名び色ハ此月の代以て深ゝろ物ありとそ但し葡萄ハ実乃名あり紫葛ハ樹の名へ一種の別名蘡薁ゝふ。

ヨビゝ月酔ゝるごゝたの実の色ふ法きゝ

(俳)照月とハ桃へあけうろ咲ゝろ野坡

(蒲萄)の実ハ爰へ生れ葡萄ゝ地高

(詩)全七字對句

雨来枝上清泉沾　アメキタツテシヒヤウサイサンルホセ
露重稍頭紫玉垂　ツユオモシテヒヤクトウシギヨクタル
水日明　スイシヤツアキラム
珠顆重　シユクハオモシ

(妙術)蒲萄と棗の根乃かゝいゝに栽て春ふいとう其棗の木ふ穴と一ッあけ蒲萄ゝれ枝とさゝ〜ゝ二三年と経て枝ふゝう長くうりて棗の穴一ッふ満ゝるゝたぶゝうの根と切ゝとれば棗の木の接木となゝるゝうゝく生長して実と多くむとゝび肉厚く棗のゝ味美へ是秘術

△桃子　(異名)仙菓○蟠実○三偷○洛陽路　(種類)碧桃白桃

○早桃　五月の毛桃　山中の冬桃　十月ニ熟ス　悪子　○霜桃　上ニ同　西王母の桃の類ニテ日本にいる〜此外種類さまざまなり　多〜又異品なるものハ大さ一抱にも及ぶものあり

俳　桃の実の眠りも見つめ初る蓮ニ　桃つゝ桃の老又やたゞ老人　一

注　桃原ふるうて世さる長閑　三くのゝのゝちこそそれ　貞柳

詩　桃子五字對句

○果實多品惟桃可佳　夭々其色　灼々其華　詩経ノ語ニテ花ノ見ルヲ云ヘリ○スベテクダモノ多シト云ドモ其中ノダイ一ナリ○為仙益壽　仙ト

顆々粧霞媚　王母千年実　セイモ母ノ三千年ニ一ヒト少ビ三ノハモノゼヤ

團々帶露肥　素人幾代孫　シンジンイクヨノ二ゴ　シンノ代ノ人ノ子代ノ人ゴノスニテ孫ハ孫ノモノヒヤ

詩　事類賦

○或制而祛邪　桃ヲ以テ邪鬼ヲサルト云　故事和漢トモニ多シ

○或美后妃之德　女ノトクヲバコノ桃ニ比シテ云故実多クアリ

○或報瓊瑤之華　玉ノカハリニ桃ヲヤラフト云フ故事アリ

皆詩経ノ故事ナリ

桃子故事

三偷　漢武帝ノ時東郡ヨリ短人ヲ献ス帝東方朔ヲ呼ンテ見セシム短人方朔ヲ見テ曰王母ガ桃ヲウエテ三千歳ニ一度實ヲムスブ此人其桃ヲ三度偷メリト云ヘリ　漢武故事ニ出

青花　山海経ニ曰磅礴山ハ扶桑ヲ去ルヿ五万里日ノ及バザル処ニテ其地寒シ桃ノ樹アリ千圍其花青黒シ万歳ニ一度ニノル

木瓜實　異名　鐵脚梨　○楙　蜀ノ是ハさしくクハリンの種類ニテ實も大体ハ似ウ又多くのるりのハ櫨子ヲ

ナリトハ嫦娥ノ月ニ入タル故事ナリ壽ヲ

ニストハ東方朔ガモノクヌミタル故事ハ

草木瓜　林檎の
ゼ〜〜いぐまも味酸ー

△槐花　六月末ヨリ七月ヲ至ル
黄花ヲ開クヨリ初ム
の木ハ種類ヲ異ニシテ葉ハ夜ル眠ル
唐土ハいいみへ槐ヲ植テ其下ニ
て訟ヲ聽ーと云日本にても
其遺風と考ヒ大臣の別名
と槐門〜〜大納言を亜槐
と呼ぶなり

詩　槐花五字對句

畫影簾青禁縣亡蟠根出
日中ノ兼ノカゲハキン　フルキアドタニハダカミツタ根カイヅル
秋香拂紫宸城荒細葉殘
キノハナノ白ヒハレレン　アタルレロアトニハコマカナ
デンダハラフ　ハガノコツテアル

槐之故事

植三槐

晉公枯手ヅカラ三事文類聚ニ曰玉
槐ヲ庭ニウエテ曰吾子孫カナラ
ズ三公トナルモノアラントイヘリ

果レテ然リ天下三槐ノ王氏
トハイヘリ

△蓮子飛　蓮の子と蔔と
房の中ふあり此と
ろ〜〜飛んで水中ふ入

能　某ハ実ハ蓮ハ蔔ハ雑物

狂　極ホも〜〜ろめて蓮ハ蔔と
くるれて人も成ハ身ヲ〜〜　宋惠

詩　蓮子詞　東坡

緑玉蜂房白玉蟬折来滯
露復含烟　三トリイロノ玉ガ蜂ノスノ中ニアリテ折テ

醉爵新蓮一百圓　ハリノ玉ノ盆ノ間味ノ汁ノソコー
テミレハツエガコツテ又
ケフリヲアムヤウニエル
アルガコトク見ユルヲ醉
テ百ホドモカミタリト

△刀豆　一名　挾剣豆。葛豆。
唐ハ赤ー日本ハ白ー

能　拘子ひてろ〜〜蔓草ヨリ
莢　宋因

夕顔實　瓠の壺盧。ゆうがほ　花白ー

哥　夕ゆふのそらにむかしを思ひそ社
さらて浮世のこゝろもさらぬなき

俳　瓢簞は月を愛する姿なり　彼然
酒をふくめば月けあり　生瓢　支考

青瓢簞　これ右ふ甘ゆー　生なるあをぐべ乃
あをぐべ　人乃面色ふたゝへうゝ世俗ふ青白ゆ

狂　病む新て青瓢簞と云ふれい
れ病疾病をもつ貧へー　貞左

西瓜　此種ハ元西域より傳へうて唐土にも漸
五代の時より始まり日本ハ慶安中黄檗隱元八朝のとき
種を携へ来りて初めてなが
さるへうへう寒国ふハ生ずず

俳　出女の口紅ひ
晴明ふ法ゝせふ　西瓜ふ宗因

狂　赤ゆうそゝ白ゆ
西瓜ゆとふゆ　ひゝゆう　海音

妙業　衣服ふ名
つゝゝゝゝ落をふよー

ものこと　近世歌内ふ種を
うーゆ味西瓜ゆ
似て美ゆうず虎のうへゆ稜
あり葉ハ蓮の葉はゝゝ藝の
中空ゆて蜀葵のごゝ

分　なにこれもふそゆへるあゝと瓜
ゆ　つゝゝゝ名をもひつゝ　西行

俳　あゝゝ瓜又非義人の俗ゝ基中

棗　壺来い上とゝ0要乗い大日
て腰細ー　0撫乗い小ゝも
味酸ー此仁と葉物ゝ漢土
ゆい数品ゆ本邦ゆい少ー

俳　針ゝに星ふ結へー半ふ露州
ふ　遊糸

狂　ちゝゝてゆへて面ゆれい針ゆ
ゆれゆゝゝゝゝ　つゝゆ　関刺

(詩) 東五七言

甜出諸錫上

アマキヲハモロ〳〵ノタメウハニイデ

今作中ノ瑞

今ノ世ノ中ニクノヨロシキモノトイフル

香居百果前

カウバシキヲハサヽクノタメモノサヽヲオクベキモノニヤ

元從外國傳

モトエンゴクヨリノタヘキタツタモノニヤ

(詩) 東詞 五言絶句

北園有三樹布葉甦重陰

ソノニ一本ノ木ガアルガ一メンニ葉ガヒロガツテカサナルカゲガオホヒカヽルヤウナ

外雖多棘刺內實有赤心

外ニイバラノハリハ多ケレトモ内ニハアカキアヽキ心アリトナツメニタトヘテ人ノ外見ハニガ〳〵シクカラクハアレトモ内心ハ清キコヽロナリ赤心ハキヨキ心ヲ云ナリ

粟穗 種類 秫。粱。稷。稗。又粟 奴〳〵

(哥) 万葉 多つ又振神の社しるうせい

其日の社へよあともかはしと

西米 故事

生顧 神代巻 保食神のひ

〳〵ひよ生どろ

少彦名神

神代巻少彦名神い甚短小の神なり

大巳貴命〳〵共ホ国造りまし〳〵終ホ淡路島ホ至り粟茎ホ縁

のぼりノ茎の立生るホ弾かれて常世の国ホ飛去りなりと云

稲葉の雲 稲の乗北そへ

おく〳〵見ゆるを

(哥) 秋風ハ田面ホ多敷さそふと

いるいのまホ雲もおく海 通茂

(俳) 与北そ云ふ移柴十雲ハ云芭蕉

稲の花 異名 ○水影草 ○富士の花

(哥) 夫木 後久我内大臣

夕くまいくやまよ出ホ我宿乃

門田のつゆの波乃花よる

うちむまて小金のふかつひ地ハ

そそるせのゆ花の人九

(俳) 芭蕉 ゆ〳〵ゆ〳〵の花 五巻

△早稲　△早稲の稔　△ときつよ。
○ゑやくみのるものゝ

(万) 万葉　石ばしのあきなどひとをも
縄くるふくんてちり　法華坊

(能) 三せんまや　三せの松に二ちり蓮二
つあるの秀や　簑ゝをまけるゝの乃　全

室の早稲　顕昭の袖中抄ニ
△　曰むろの早苗ゝ
むろんむろれゝこゝもとゝ
ろのゝやゝもよむゝいゝ

(万) 堀河百首　四ゝれるゝ苗をゝれい
若ふゝり　ゝふいゝをゝ室はゝ

生類

(八九) 七月の生類を集むゝ不ゝる
月にも用ひるものゝ　此年ゝの分　八月又九

初鷹狩　△小鷹狩　△初鷹狩
△　秋もゝ　△初鷹狩。むゝ公
郷の鷹狩ゝ　冬い大鷹にて
大鳥とゝる　秋い小鳥狩ゝ小
鷹をけゝ。雑談抄ふ小たゝい
雀鷂。雀賊。小鷂。鶻鶻をゝ

なり○貞徳説ゝ鳥屋で出の
鷹と居て初めて狩ゝるとゝ
ゝ初鷹ゝいゝも同ゝゝゝ

(万) 夫木　順徳院

著ゝ人のゝやのゝあきぢふゝをゝて
おの五ゝもかゝるゝ牧乃狩人
ゝやゝゝる雲ゝふゝまゝあゝろの
狩ゝかゝゝんゝ　拾月ゝ　衣笠大臣

(詞) ゝろてかゝ。おもぎゝひ。みゝる。
ゝゝをゝ。こかゝゝ。つゝをかまゝゝ。
屋ゝをゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。
ゝゝ。ゝ花。ゝなゝ。ゝゝ
ゝる。雲ゝゝ。秋ゝい秋の花ゝ
義ゝ仲の花ゝゝよゝ合ゝく

(連) ゝゝゝゝゝの秋のあゝゝ　用桂
あゝもゝんゝい花のゝ小ゝゝ　宗祇

(能) 棹ゝゝゝゝゝの　立申
お興のゝゝゝもあゝん和ゝ鶴　後白

(狂) ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　木葉

△鷹打 山ゆかで鷹と捕を打と云そのたを打おろしといへり多くは伊豫の國にそとる

△荒鷹 鷹と捕アていまだ人ならざると云則

とりたるまゝの鷹をいふ

(俳)蠅ひろ荒鷹を打たるを

△鳥屋勝 四月より羽毛と替七月上旬までは羽毛と元のおゝくかくるとは片鳥屋とも片鵠とも云二年めと兩鳥屋とも兩鵠とも云三年めは兩片鵠といふ初よりも羽毛全くそなはりて勢よくを鳥屋勝といふ三才目金出

△鳩吹 手と口ふきて鳩のこゑと真似してたらせる

(秋)袖中抄に出

(俳)旭ふるやちらしの星ゆり南山

年ゝ旭ふるく牧の狩人を

おのゝこゑ秋も鳴くなる好忠

△秋蛙 秋も鳴く蛙 (俳)人新

蛙ゝ秋のゝゝ都青

(狂)秋雷かゝ手ふ麦なけい

水ふゝ蛙の秋乃夕立 貞柳

△秋蠅 (俳)風呂さんの窓を

ゝゝゝゝや牧の蠅 鬼貫

△秋蚊 △溢蚊 △殘る蚊

(俳)なのはなや昼面よそ通 雷蛙

△秋螢 鈴鹿藤根るゝの邊

溪ふハ八月比ゝて沢山

ふ螢あり俳るゝ冷気俄ふ

至るゝれい螢ゝる消ぬ

○蚊蠅螢の類夏の部ゝ異名

等くゝくあるすゝ懸ゝて秋へ

る虫ゝり別ふ子細ゝ

(哥)ゆく雲の上まて高くハくハ

秋風ゝゝ尾ふつゝゝ 業平

(俳)月退や雲ふ秋の天の乃入重

△秋蟬 漢土にそれをすべて蟬を秋のものとす

(発句) 捨遺神々に蟬の羽衣ぬくてはかの和風くちもとられぬは

(俳) 月はせかれぬ鳴や秋の蟬曲樹 秋の月に老ふ蟬のみころも色 許六

(狂) 元蟬なくさをびるる羽織かな みゝうの秋の日紙もさいろう 一東

(詩) 秋蟬五字對句

客老愁城下・小池兼鶴浄
蟬寒怨路傍・古木帶蟬秋

(詩) 今七字對句 詩礎

萬貝白波迷・白鷗落日中
一林黄葉送秋蟬・不知秋

△蟬声驛路秋山裏・噪暮蟬

草色河橋落照中・漢宮秋

△蛁蟟 (一名) 蟪蛄。蟬の種類。 (異名) 蜻蛉。蟋蟀。黒色

或い青紫長さ一すいろ此せいい夏鳴多俗よろつくしょうと鳴

(俳) 秋ふる揺れも法しょう 素夫

△茅蜩 (異名) △寒蟬 ○茅蟬 ○つくつくの蟬より小すて

青緑ろう山中ふあるて晩さ そろう依て名づく寒くろうて 尚よくく其声聞くふ堪よう

(発句) 夕立のそれもあるぬ夏の日れ かくふく山の日ゝしの声 式子内親王

○古歌かハ夏ふ読ろう連俳い秋ふ

連　日々しかぜうの医　秋の雨　肖柏

俳　月ムしや秋のこゝろ　終寺　発句集

秋胡蝶

毛虫或ハ芋虫などの化したるものなり

哥　源氏　秋のの草　秋はうつむいろくさくさ

俳　塵こや今はるの菜のるこゝ　蕪園の発句集　秋のてふ　蕪二

狂　はるもあれはるもあれ秋の菜物　あやなく塵のまひくそする　樗賀

田畑虫送

田蝗害とるさんと

△田畑虫送る時農夫大うるむしのかくとつくり鐘鼓と鳴らして野外ふ送る又ハ松明と照らして田中と呼いるもありむしり陰陽寮ふ命じて船岡山ゑまつしあつ〻幸あり

蜻蛉

和名のアキツバ　△胡黎　ヨンバ　○トンボ　△アキツムシレ

△赤卒　△赤えんぶう　○あかやんま　○色やんま　○いぶきも大小あり

色と異おするのこゝろやんまハ古言ふエムハといふ通音あり

かげろふハ元陽炎の名あり　この虫水辺の日かけふ飛ぶがゆへ

陽炎の名といかりうるとこゝ秋つむしといふるハ惣名にて古名なり次ハ故事あり

○胡黎俗ムキトンボウ大うして其緋なるもの　鮮　と名づく俗カ子ツケトンボともいふ

○古哥ふかぶろふくさのこゝろ二ツあり一ツハ春乃紅ゆふの事ッそこれむしの事あり

哥　後撰　秋はねのとゝのふふ絲　沖のちりやワうきこのくゝ

俳　かるろいな奥れろ寄やんふ　越青

狂　おのゝ尾と鞭長ゝや一そよ　川柳　ひこあるやんまえ多　廊素

詩　全七字對句

風定鯽技堪綴足　相逐戲

カゼサダマリテフナノワザタヘタリアシヲツヅケ　アヒオフテタハムル

カセカヤンテカラニハホソイ　タガヒニオツタテタハムル

ヌダニモアレラカラニヨイ

雨来密葉好藏身　鬪高飛

アメカフツテクレバミツゲキハノ中ニ　クヒアフテタカクトブ

ヨヲカクシヨイ

蜻蛉　日本紀神武紀飛

故事　醫呫　一年夏四月巡幸

ちゐさい脇上の嚶間丘に登る國

の狀を望まぜのひてのたまはく

あるかえやよ国を獲う内

ゆゝのまゝに国とゝくとも猶蜻蛉の

醫呫せしが如しとありこれより

日本と始めて秋津國とゝく

○とんぼは此むしゝに尻よりひ付て

やもゝ飛ぶなりゝ

蟲　〈虫の音〉〈虫の声〉。虫の題

〈蟲〉ふハ松虫きりぐすをのゝい

次に記す分いろ〻もよあり

（哥）夫木　花山院

家集　月前鬪虫　清輔

めもあやに小さきものゝ生れ月をも

さこそきゝうゝる虫は思ふ

新後撰　野虫　為氏

消秋のいろ〻ゝ招くてきゝうゝを

ゝるまゝにの人乃哀に聞ゝん

亀山　庵虫　為世

神系なる麥のいなりれ夕つゆに

雅　まとゝうゝ松むしのうゝく

（詞）哀。ちゐさい虫の鳴くこゑ。ちゐさる草に人さむ。麥。麥

ちゐさる草に人さむ。ちゐさる虫。ちゐさ

の系ちゐけ蓬に人ちゐ

者　淺茅に　あさちゐ系。庭のあさち。

あさちゐ垣に人ちゐ恒夜に人ゝれいを

ゝ。鳴あ寺。夜ゝで鳴。ゝ夜

ゝ。抛に抛かせゝ。ゝ抛ゝ

抛ゝいゝる。抛ふゝ人ゝ床に庵近き

往麻の松　月に月の松すゝ。庭に

[illegible]露の玉と命。つゆと
よんが。義尊る。そこすむる
霜おくれ　秋のまう　風に　秋空の風ふかる
蟋蟀　秋のもきよのゆひ〳〵むし。人すろ
虫の声もうく。ひとり秋のなこと
をそこの。もろもろ[illegible]きあ〳〵す。

連　風や秋深ひとしき虫の声　片柏
　　[illegible]虫の声　其角

俳　[illegible]の秋のまくろ[illegible]

詩　虫詞五字對句

砌冷蟲喧壁　客愁連蟋蟀
（ハカヒヤ・カニナハハシガザレ　タビ人ノモノオモヒハム
キニチカツイテ・キリニテク　シト・ヒニカフナリ）

簾疎月到床　亭古帶蕪葭
（スダレバヌツキイタル・ヒ　テイフリテオブ・ケンカヲ
スダレガ・バラニナレハ月カ　チンガフルビテアレト
ゲモチキニユカニテサシコム　ヒトツニナル）

詩　虫詞七言對句　詩礎

蒹葭曙色蒼々遠　夜沈々
（ケン・カノ・ショショクサウ〳〵トシテ　ヨガシン〳〵ト
アレハラノ・ヨアケノ・ケシキガアク　フケル）
トトヲクヒエ

蟋蟀秋声處々同　月色深
（シツソツノ・シウセイ・ショ〳〵オナジ　ゲツショクフカシ
アキノムシノコヱハイツクモオナ　ツキノイロモヨフカ
シフケトニキコヘル　ケニユル）

△虫撰　昔ハ殿上人さゝゐ野ゐど
へ逍遥しゐのひて虫と名
らゝゐひ〳〵ゝゝゐあり。松虫鈴虫
の類とゐ〳〵ゝて加茂の社司よ
り奉り〳〵事　禁秘抄ゝ出

忠頼

△年中行事
いろ〳〵ふさろ毋の虫と夫人乃
花とろ名ゝ名ゝそろるゐ

△虫合　上ホ同〳〵　俳　寂〳〵さんそれ
も杉ゝゝすむ〳〵合　北虎

△虫畫　殿上人乃虫合のゝゝ
平家物語ゝこの語あり

△虫籠　今も猶加茂の社司よ
りいづるゐの奇工目
をれどろゐろ

俳　玄純や蓋ゐゝ秋のゐ[illegible]す　野水

△虫賣　俳　むし〳〵うるゝ〳〵ふ
〳〵ゝゝゐゝ百ろゐ　梅翁

△書虫

○鑢虫○鳴く声
馬のくつわの音

に似たり故に名づく○松虫○鈴虫○轡虫の三種人々其音を尤賞す

(哥)山家集　家隆
あはるゝ人まつ虫の鳴くされハ
あはれてそふる宿むしろ哉

△月鈴虫

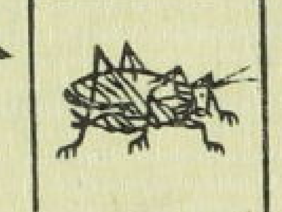
○金鈴虫とも云又月鈴児とも云色黒く少し黄く音ハリンくと鳴

(哥)夫木　きくもゝくさのくるしき宿のむしろ
絲の乱れをくむしの声　艶光

(詞)ふりすてゝ神ゆる山　すゞむしの鈴ふりさす

(連)鈴虫の声やかれの露のる　紹巴

△松虫



蛉とも云其音ハチンチロリンと鳴之

(発)散木
夕されハ野べの籬や物をおもふらん
松虫のねに参なりけり　俊頼

(付)飯坂の里。むかし僧に。夜ごとにまつむしても。松虫ハ手引といふものあるて

△人まつ虫。跡まつむし。みかよう

(連)松虫も風の中うつ夜かれの声　宗祇

(俳)松虫ハ籠をそへせのかなしや　友静

○むく虫松虫の異名なり一虫まつむしとも云又松虫ハ声清亮にしてチイ〳〵といふ如く松の音に似て松虫といふともいふ○謡曲野の宮の閨に誰まつ虫の音はりん〳〵として風茫々たる（へぶ）松虫ハまつ〳〵とすくや　又

(狂)たきゞのうちにまた松の露やまたようやくとなく松むしの声　貞徳

右の外説多し上は圖する所ハ畿内にて人家籠の内に養ふ処也尚國々水土によりて大同小異有

△蟋蟀

一名　莎雞○ちやん九○そでつ虫○ちゝろ虫

其音キリくスと鳴く一声二声して舌つゞみをうつ　委しくハ七十テ目にあり

○順和名鈔曰蟋蟀一名蛬○本里木里須といふ加茂真淵の説

よハ蟋蟀ハ万葉ホ

哥　秋風之寒吹奈倍吾屋前
　之浅茅之本蟋蟀鳴毛

くさくさのもとにしのぶれハ秋ハ来ぬ蟋蟀
蟀とくさくさとよとなるハ誤り
てくいろぎとよむべきなり

(古)　夫木

庭草ふかくさあれてきりぎす
なく声きけハ秋ハ来ぬ　恵慶

雪玉　早蛩鳴復歌　為氏

りのかれる和秋風のさうくくを
まくと床をさ[illegible]

詞　山落。絲さえの家。枕のりく
さの肉ム。ゆくてさせとなく。

連　さうく寒ぬ絲ぬ[illegible]

(能)　常灯や蛩あてくさ嵐雪

促織

一名　斯螽。趨織
俗ふくくくくくいとり

蟋蟀　もくさうくくと云ハ蟋蟀鳴声
冬蟲　もくさうくくと云ハ蟋蟀鳴声

くさくさと如くキリくくチョンとなく故
音ふ依て名づく此斯螽ハ狀乃
俗ハよりて名づくく

(字)　金兼　さくかれ[illegible]
さくあるひハ[illegible]

詞　声のあやと緻る。さくくく
あるいさく。業ちくさ。萩のみき
あれのたて寄のめさ。[illegible]。山の孫

蚣蜡

一名　蜻蛉
て光ありて

生ゞ秋ハくさくさて鳴ハ三文図会ニ出ル
○蜻蛉。古保呂木ゆうと順和名抄ニ出

○千梅の説ハいくくかハ[illegible]

(能)　ハかろぎやくさひ[illegible]

竈馬

脚長く好んで竈の傍ハ
狀促織ハ似て稍小く

鳴故ハ竈馬云[illegible]
事の人是とキリくすと考ハ云ハ誤ハ

(俳)　打ちハ[illegible]
掃の梅ハ[illegible]
馬黒

○こゝろくを。こゝろ。これらの三虫同類なれど和漢とも弁別詳らかゝらず詩経に五月斯螽動股六月莎雞羽七月在野八月在宇九月在戸十月蟋蟀入我牀下とあり朱子注に三虫一物にして時々変化して其名と異なることあり

稲虫　八月稲の穂に委しきを多く七月とするは季の

阜螽　此虫性不嫉雄虫数虫を産む一母百子故に百子云

又此虫二夏に子を百生ずる故に五百子云

（俳）門畑の美くく退出ている虫

蕉虫　（俳）蕉虫乃季ゝ一紫や山水母　友静

蓑虫鳴　（漢名）蓑衣虫○結草虫○礎債虫○木螺○このむしゝといろいてゝ季ともうぐるのむしゝとゝ

しに秋く清少納言の詞に風の音聞知りて八月ぞうぐるまこゝに父ちゝくあるこゝろをうげに鳴くいみ〳〵くあれうしいろ

（分）蛩　秋風あむなもかたしてのむみのむの声　寂蓮

（詞）そろ本の系。秋風そのむ。

（俳）この虫は家をそい人家近く鳴く声牛馬を追ふがごとし

馬追虫　田

稲蝗

○叩頭虫　又ゝ

そこゝくもつり　（古名）イヲツキ　三口形緑色うして頭尖り社人の烏帽子着るに又両足の高さとなれ俗に祝宜と伸して船なりゆへよつき虫も又

藻鳴虫　△藻住虫の音。哥俳ふこれうと多くよ

そう藻ゝ付て殼の一片なる螺ゝ
ゝ殼の意なるし
○又刈る藻ゝ付て居て此虫我々
と身と亡を殺ゝ名づく 万葉雅抄
奇なる多くあつまるこゝて流り
(云)古今 あるかなきかの事なるに我ゝ
なるなるあ世とかうしに 典侍
(俳)ゝ喪ふ人の涙ゝ 嵐雪

蚯蚓鳴 (異名) 蟋蟀○寒く蛩○陽頭○土龍○歌女

みゝをい目不見の訓なり鳴く
擊ゝるゝ清く笛とふなり
雨ふれい出る晴れい必夜鳴く
(俳)秋ゝ来るふよひ寒てゝ亀貫
(狂)わかいゝゝ鳴ゝ
うたゝすの教もよいゝ 舊晋

蟷螂 (異名) 拆父○蝕肘○蒲

蚣○不過○斧○好んで
肱とる故ふいおもしてその名あ
ゝ暑していろ

(作)さろゝ神ゝ
横刀壊螂ゝ斧 波の場
(狂)蟷螂ゝ斧とふ
たゝすもゝ
蟷螂故事

拒車 齊ノ莊公出テ獵スル蟷螂車の音ヲ聞テ斧ヲ振テコレニ向フ莊公ノ御者ニ問フ答テ曰ク蟷螂ナリ此虫進ムヲ知テ力ヲ量ラズ敵ヲ輕ンズルモノ也王曰コレ勇アル虫ナリトテ車ヲ廻シテ避ケタリ四海ノ勇士勇ヲ賞セラレタルヲ傳ヘ聞テ齊ニ帰レテ国甚強レト云云

常山虫 此虫小児のやまひ

ゝ益ある

必用

七月 一ヶ月要用の事養生天気食物料理とする

樂事

風涼しく快〳〵○虫の音あつまれ

なるかはあつきのうれしも夕けよ
夜ふかくなるまでは此月さへに
野辺より出て稲葉露
うなるしの穂の出心青葉
て風にそよ〳〵けしき遠く
のそわ平々〳〵して面白〳〵

破軍向方

夜九ツ 戌の方	夜八ツ 亥の方	夜七ツ 子の方	
朝六ツ 丑の方	朝五ツ 寅の方	昼四ツ 卯の方	
昼九ツ 辰の方	昼八ツ 巳の方	昼七ツ 午の方	
暮六ツ 未の方	夜五ツ 申の方	夜四ツ 酉の方	

日刻 ○未日申日○未刻申刻事〳〵
日〳〵うとふ用也へからず

方角 ○家普請他行東北の
方に向て大凶〳〵

天氣占候 卯の日三月
月の内小虹あらば米をかりめ
野菜もそもろ〳〵

衣服式 帽子を着る當月
の式〳〵袴は鶸色
萩重 表むらさき 裏薄紫 **花薄** 表紫 裏白
裏すゝれいろ
上つかさに花の色を配る
女衣服 白帽子を着る式
うち上前は白あげの
かゝひ〳〵に梶の葉あるい草
のをゆうまゝい萩萩をゝに
はなのうえにうしもの
養生 夜潮ひやゝかゝ
衣を厚くし涼風を
やゝうゝ事をうれ夏の間
勝理ひゝし表気をすゝ
風に感にやゝ或い感冒
寒疾嗽喘心の病
慎んてこれをさくべ
○比ところそ
刻をせゝ凍寒を洗そ

飲食

七月ハ一ヶ月の食物ハ䝿あつき出す

焼米 糯米ハ青稲を炒て搗きて熟す[illegible]粳米をもて[illegible]味[illegible]て味甚美なり

(非)焼米やきこめ[illegible]てつゝ稽の[illegible]蜻蛉日記にやいてめ[illegible]あ[illegible]

切麦 △ひやむぎ △あつむぎ。ひやむぎ夏[illegible]用ふ出す

○ひや麦いふへんへいふる物[illegible]まぎき詳ならず今のひ法[illegible]

ハ細ぐ温飩とひ中ー食ふ[illegible]らり文め麦ハ冷いるを[illegible]

おもしあり麦ハ煮てあつき[illegible]とつかる職人哥合ふ

(今)てうきうきのうつ[illegible]むしあげのせうれ日をうるる

○むしあげの瀬戸ハ備前国より

(俳)切麦やあらしれそる膳の上蓮

七月飲食並料理献立

禁物 雁肉 思邈云此月食ハ神を破 又礼記ふ此月[illegible]

介盆あらい 蓴菜 李廷云七月蟲多く著く此を食へハ霍乱せしむ

好物 胡麻を食ふべし[illegible]闇をさする 摂生論よ[illegible]

汁 塩ぶり [illegible]にゆ ほそ略 めうど

あくまいり さんせう やつ[illegible] 午房[illegible] [illegible]むし[illegible] ゆの皮

ほうかい かうど

清汁 しきびさすぎ [illegible]こせ [illegible]

うす[illegible] もう[illegible] [illegible]えび [illegible] まて貝 [illegible] うどめ

秋こぜ皮むき [illegible] [illegible]

[illegible] こせう

膾 [illegible]

せいご・赤み あそび・大こん [illegible] [illegible]

差味

煮物

和會物

吸物

精進汁

清

菓

煮物

和會物

博物筌　小本　合一冊

本ハ神社佛閣人物草木鳥獣外天地の間のあらゆる事を委しく出す。秀逸の書。

神佛祭礼記　小本　一冊

日本の神社の系孔佛家の縁起

諸社寺記治遺　全　三冊

元年貝原先生作の日本歳時記を品冊

拾

博物筌　小本　合一冊

本ハ神社佛閣人物草木鳥獣外天地の間のあらゆる事を委しく出す。秀逸の書。

神佛祭礼記　小本　一冊

日本の神社の系孔佛家の縁起